以良都女

第二十一號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十一號目次

挿畫。 ビスマルク公并にブーランジェー將軍の影畫

家政。 獨逸婦人家政の熟練 いらつめ料理〇あげ玉子‖いりつけ玉子‖甘藷百珍‖粉類を久しくたくはふる法‖砂糖のアクを去る法‖最も正しい呼吸法

小說。 をた巻（加納雨柳齋）

流行。 六角非けた小紋〇針さし〇梅の花把〇櫻及山吹の花把〇姫小松の根掛〇蝴蝶の根掛〇丁子の根掛〇卓子被の縁の縫取もやう〇そぶれいの縫取〇モノグラム五種、かの、かね、かる、かっ、のふ。無半襟の婦人和服〇婦人肩掛〇薄竹色の羽織〇小紋の帶英國新發明粒織木綿一名空氣の衣服

文藝美術。
夜の霧（美妙齋主人補譯）
蝶（佐々木光子）
朝鶯（佐々木信綱）
梅（竹屋雅子）
ならばおぼろに（たふや主人）
海邊松（西升子）
立春雪（太田みどり女）
愛の光
現今米國二人の婦人文學者
佛國現今の文學大家アルフメン
ソトーブの近事
柳櫻都錦繪 二幕目（立花屋かをる）

雜纂。 外國人の日本婦人批評 東京盲啞學校啞生の書狀 露國婚姻の風 活きた所 喪服の色

小說。 繡鴛衾（麴亭飯人）

批評。 明治唱歌第二集及幼稚の回第一集 產科婦人科研究會月報第一號 美術園 都の花第七號中大槻如電居士の無花果双紙

寄書。 生活の程度 婦人處世の要

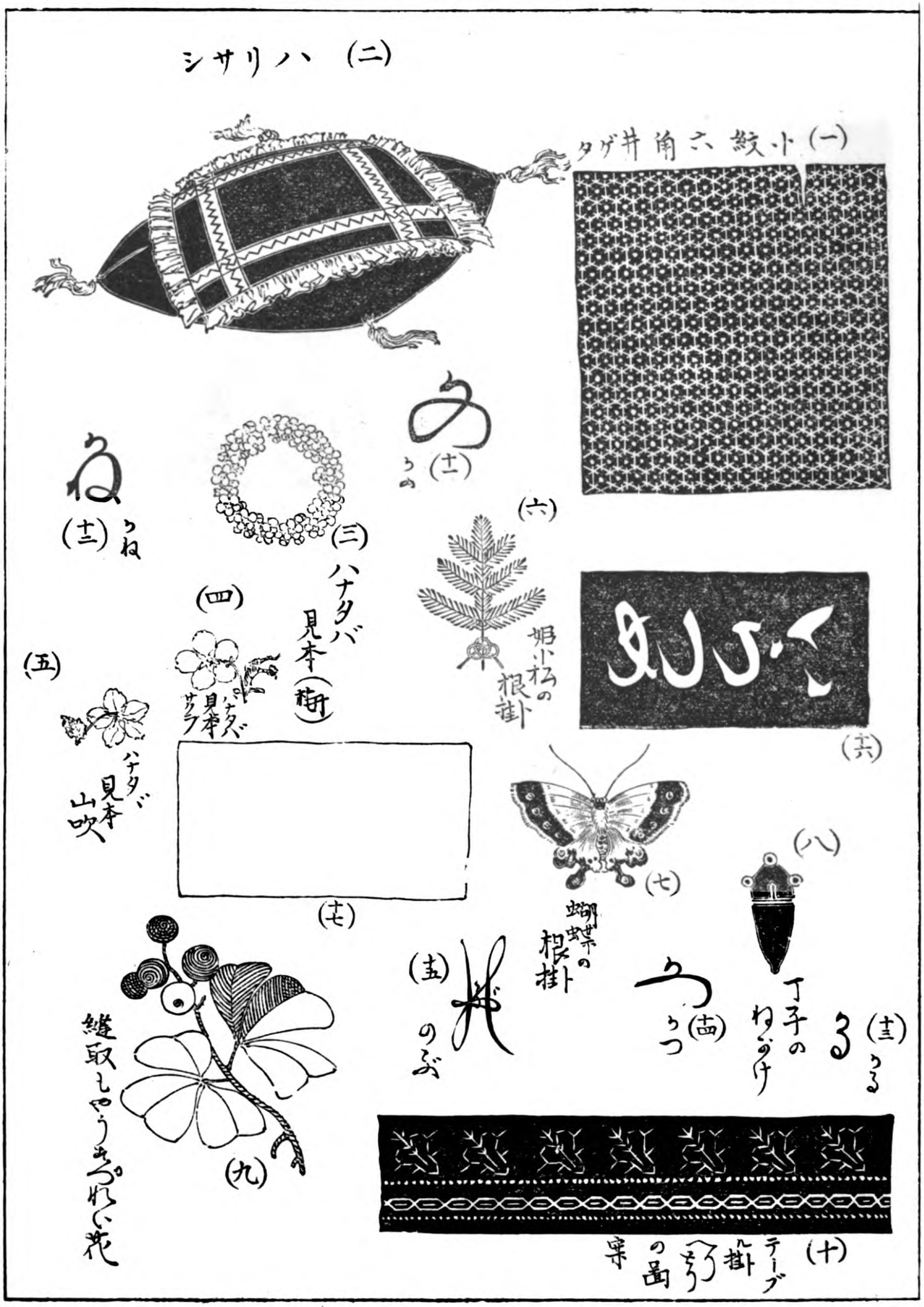
通信問答。 肌の色を白くする法‖フケを去る法‖靴のあらびたのを滑にする法‖火タコを治する法‖靴下及び靴などの臭氣を止める法‖正月に門松を立つると‖厠の臭氣を去る法‖身體の肥満を防之法‖顏の赤くなり且痒みを治する法‖祝炮百一發の由來‖布に付いたインキを落そ法‖金屬の鏡の汚れを去る法‖編物の本‖寄宿舍の完全な女學校‖身体の肥満そる法及黑子を去る法‖松竹梅を祝に用ゐると

餘興。 謎懸賞小說一册

月報。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

流行の欄内を見よ



(一) 小紋六角井ゲタ
(二) ハリサシ
(三) ハナタバ見本
(四) ハナタバ見本サクラ
(五) ハナタバ見本山吹
(六) 姫小松の根掛
(七) 蝴蝶の根掛
(八) 丁子のねつけ
(九) 縫取もやう
(十) テープ掛
(十一) め
(十二) ね
(十三) る
(十四) つ
(十五) のぶ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

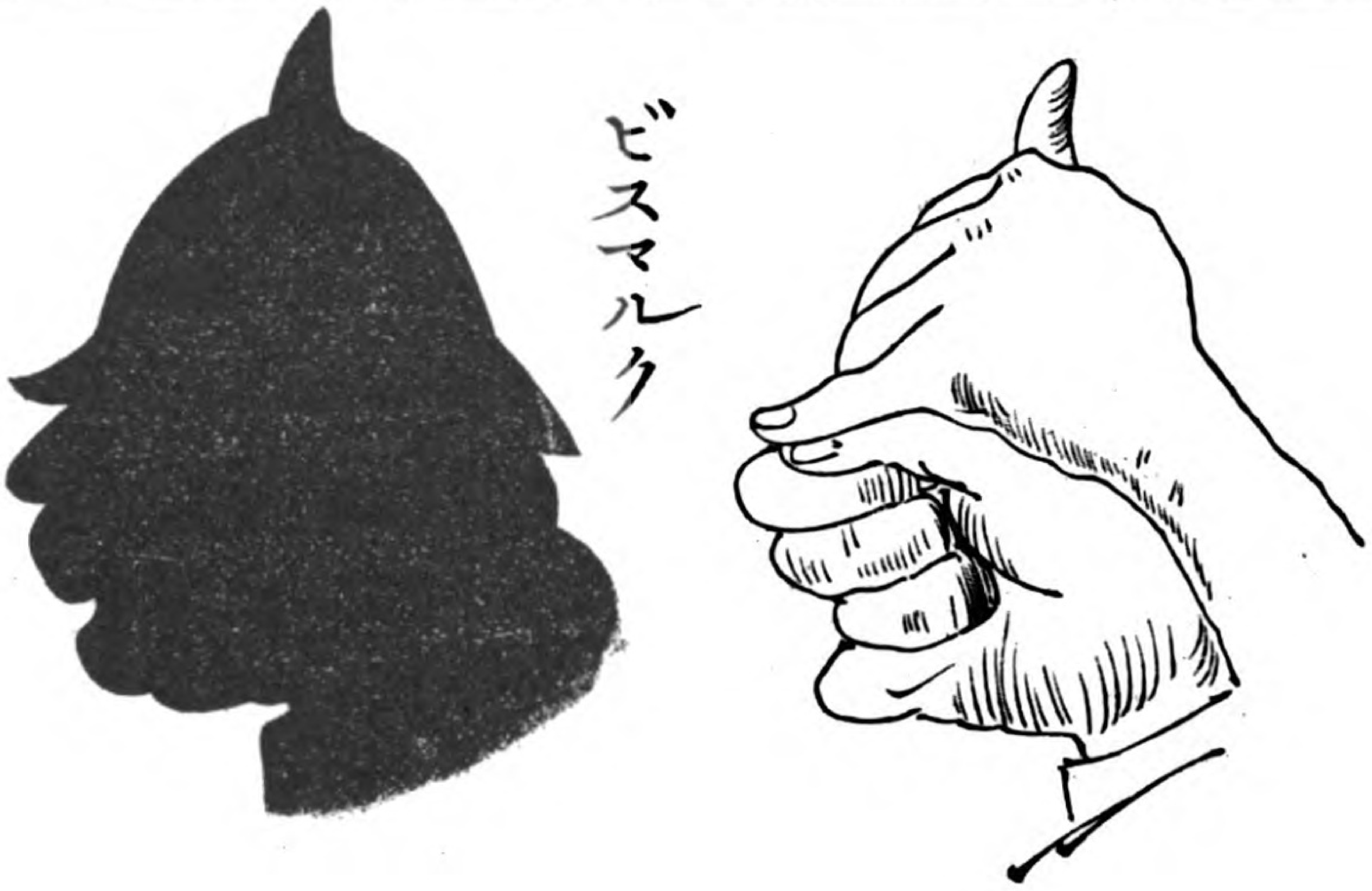
餘典の欄内を見よ

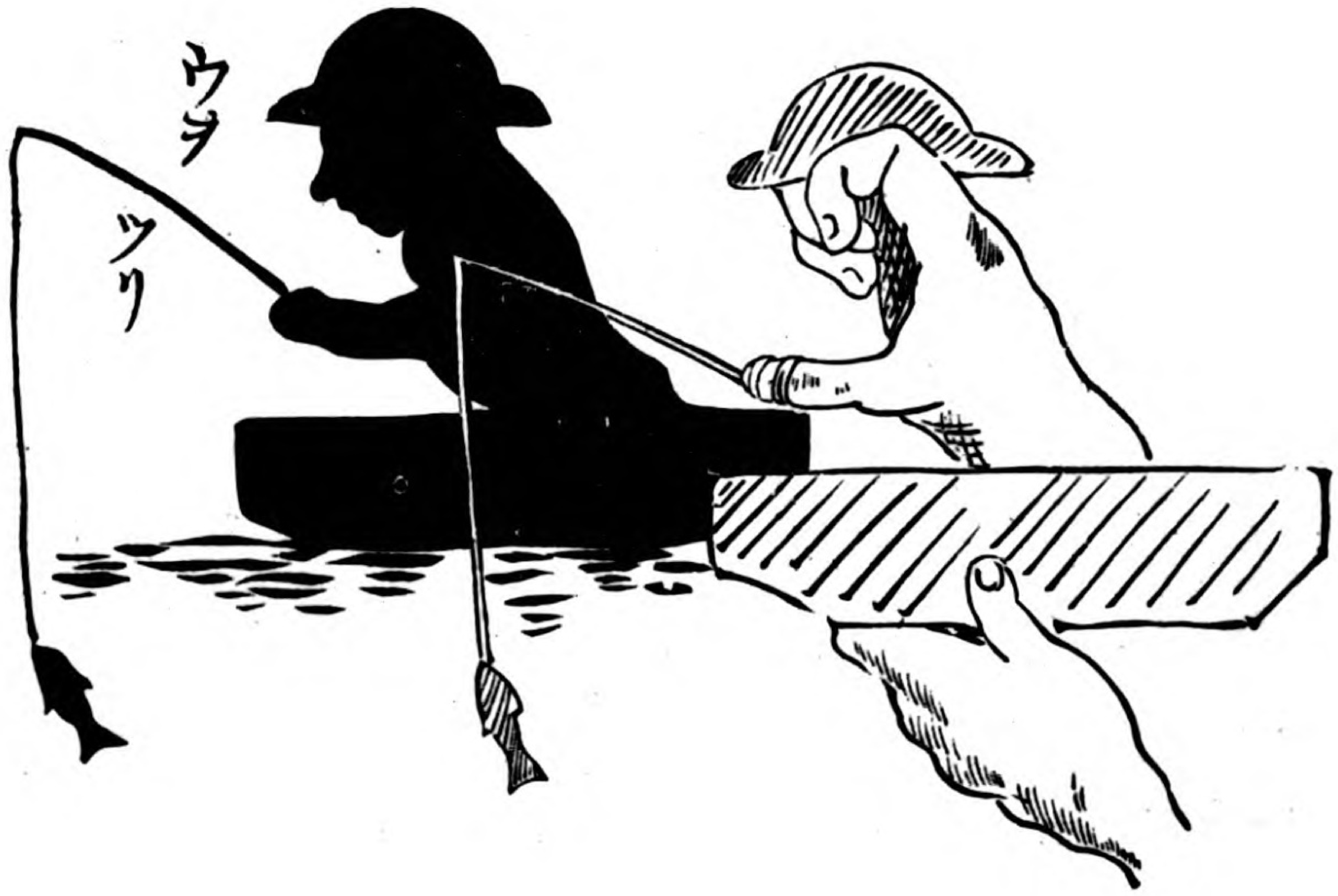
いらつめ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

尚面白き新工夫の影畫を續々掲載すべし





Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十一號

家政

獨逸婦人家政の熟練

花よりも實を尙ぶ獨逸人の風習のうち、殊に他國に超えて居るのは獨逸婦人がよく家政に通じて居ることで、その通じて居るのは原因の有る事です。歐洲諸國の中でも國によりては家政をいやしめる處も有りますが、獨逸は決してさうで無く、中々身柄のいゝ人さへわが妻や娘が家政に熟練の有るのを誇る程です。大抵十四五歳のころ、娘たちが普通の學校を卒業すれば、兩親の見立に因つて田舍の紳士か、または物持の家に奉公に出ます。無論、品行も正しく奉公、それで一二年を送ッて後、今度は都會の紳士または有名な旅人宿などへ移ります。が、いづれにしても賃錢を望むのでは有りません。そこで賃錢を望むとなれば、いきほひ獨立の氣象は乏しくなるもので、それでは益にありませんので、それで主人から賃錢を受けないのです。小使や身のまはりは親の方から何不足なく差贈り、たゞ一意家政の熟練を得、世の中の苦辛を知らうと力めるのです。それ故、どこへ行ッてもまゝ普通の奉公人と同樣に取扱はれません。つまり主人の家へ遊びに來て居る令孃の格で取扱はれます。よッてその家の他の雇人の上にも立ち、いさましい家政の女王と爲るのです。これで一二年送ッて居るうちには充分に經驗は得られるもので、それから家へ歸ッて嫁に行くか、或は鋏を取るか、爲ます。獨逸一般の婦人は大抵この類で身を敎育して來る、それで家政に熟練の點に於ては世界第一といッても宜いところにあるのです。

いらつめ料理

第五　あげ玉子

鷄でも家鴨でもの卵を湯出、更に玉子と混合はた饂飩粉の煉物をつくり、卵を薄く切ッてこれにその煉物の衣をかけ、さて油で揚げるのです。

第六　いそつけ玉子

前のとほりに玉子を湯出て薄く切り、別にかきみだした卵のぬめりを塗ッてパン粉を吸付かせ、さて鍋にすこし油を置いていりつけるのです。

右二種とも味は鹽をつけるのが一番よろしいでそ。

甘藷百珍　(前號の續て)

(十八)　海鰌いも　生にて擦し釜底墨にて色を付け蒸し筥の内へ二分程にむらなく敷き其上へ其儘の擦しいもを一すばかり入れ蒸しあげ切て麻油にて少し煠る。

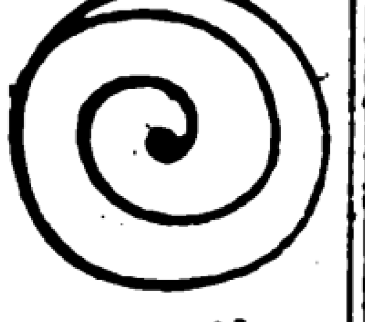
(十九)　辛板糕いも　蒸しいも馬尾篩濾百目　粳米粉五十口　砂糖廿匁　辣茄末二分　捏ね合せ箱に入れ蒸しあげ二日ほど置き一分程に切て乾し鑿子にて焼き用ゆ。

(廿)　最中月いも　(六十五)藷粕(藷粉)を、(十六)　鶏卵割いもの如く捏て打展し二すぐらいの圓に切り乾し上げ焙爐にかける又石蜜末を入て捏るもよし。

(廿一)　味噌漬いも　生にて薄く切り味噌一層紙一層いも一層と幾層に漬るなり。

(廿二)　醪掛いも　生にて小骰に切り醪を擂盆にてよく擂りいもにかけて出すなり。

(廿三)　水玉いも　生にて濶にむき剝きためを其儘置き舊の如く緊とまき小口より分半ほどづゝに切麻油よく煮たゝせ煠る



此の如くそきとおりたるやうにあるあり。

(廿四)　錦いも　(六十五)藷粕石蜜末入捏て打ち展ばし色をつけ焙爐にかける切やう好次第。

(廿五)　鳥肉擬いも　生にて擦し蜀黍末を少し交合せ竹箒に五六分程に付て片々と切り少し油にて煠げる調味好次第。

(廿六)　小鳥擬いも　生にて擦し榧實の皮仁ともに碎交せ小鳥の肉の碎きほどにとりて麻子二三粒入油にて煠げる調味好次第。

(廿七)　取合いも　生にて擦し青色黄色黒色此三色を取合せ筥に入を蒸し小口切り○紅藍染を蒸時は白礬少し入てよし色付法(十七)。

(廿八)　煮鶏卵いも　生にて丸剝にして長一寸五分程に切て蒸て中を剝抜むしいもの馬尾篩濾を紅藍にて色を付中へ入小口切りにす。

(廿九)　衣かけいも　生にて切り葛粉水にて解豆油少し入れ藷をまぶし油にてあげる○又いもと生薑同しく細きりにして取合右の衣かけ油にてあげるもよし。

(三十)　藷衣　銀杏　栗子　祇園坊　茨菰　午房　筍子　豆

油にて油つけ○いも生にておろし葛粉少し入たるを衣にかけ油にてあげる。

(卅一) 新衣かけいも　生にて擦しむしてよろしく取　葛粉に青粉合せ水にてとき豆油少し入衣に用ひ油にてあげる。

(卅二)　シユブンいも　(六十五)薯精を絹篩にてふるひ糊の如くに煮き堅め白玉位に取　湯　にも菓子にも好み次第つかふ

卅三)　饅頭いも　薯精に葛粉交せ合せ醴にて展し漉しいもに砂糖入たるを餡にして饅頭のとほりにあしらへ焙爐にかけるよくかはきたるを蒸すなり。

まづ(六十五)を出すべき時ではありませんが大層ひきあひにでますから取越してお傳授いたします。

(六十五)薯精　生にて擦し水に入れ銅篩にてこし其の水を淘底にしづみたる精をとり水四五度もかへ日に乾したくはへ置き時に臨て用ゆ尤も寒中の製を佳とす△葛の代りにつかひて吉野葛上品に勝れりたくはへ置て平常用にすべし。

粉類を久しくたくはへる法

すべて物を臼でついて居るうちに摩擦で熱がおこり、蒸氣が盛になります。　それゆゑ、之を直に取ッて袋へ入れて置けばやがてそのために必らず粘氣が出て、終に粉は固まッて仕舞ひます。　小麥の粉でも、辛子の粉でも粉屋から買ひ取ッてそのまゝ貯へて置けば必らず固まります。　これは粉屋で臼で挽いたまゝ直に賣るからです。　之を防ぐにはその故臼で生した熱を蒸發させるのが一番で、すなはち臼で挽いた後ちひとまづ粉を空氣にさらし、十分に風氣を入れてさて、貯へるのです。　粉屋から買ッた粉をも念のため斯うして後に貯へれば決して固まる事は有りません。

砂糖のアクを去る法

適宜に砂糖へ水を入れて煮たてゝ外の鍋へ煮汁を移して、さて玉子を割ッて落せばアクは直に上へうきあがるものです

最も正しい呼吸法

人間と下等動物とを比較すると却ッて下等動物の方が人間より天理に循ッて居ます。　學者が人間と獸類との相異の點を言語の有無に置いた、そこだけで云へば成程人間の方がまさッて居ますが、しかし、天理をよく知ッて苟もそれに背かぬといふ事はむしろ下等動物のまさッた處です。　呼吸法など、即ちその一例です。　これに因ッて無識な解釋を與へ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「天理を尚ふものが下等動物、天理を物ともせぬ物が人間」などゝ云ッても差支へはとんと有りますまい。なぜといふに、下等動物は天理に從ッて、天の命ずるまゝ呼吸しますが、人間はさうでありません。

去年のいらつめでも竹中醫學士が肺病の話しを述べられる時、鼻から呼吸するのが正當で、口からするのは天理で無いと云はれました。實に、これ通りです。 口は呼吸するために出來て居るもので無く、鼻がそのために出來て居るといふことも構造を見ても知れます。 しかし、人は多く口で呼吸します。 口で呼吸すれば外部の冷な空氣が直接に、冷なまゝ咽喉のやわらかい處に觸れて大な刺激を與へます。 鼻は決してさうで有りません。 第一鼻の穴の狹いのは外から來る空氣の量を少くして体溫をそれへわかつためで、鼻毛の有るのは空氣中の塵芥を濾し取るものです。 さて鼻から空氣がはいれば、その空氣は身体の溫度と同樣にあたゝまて、塵芥も無くなり、きはめて適當な物になッて肺に入ります。 それゆゑに咽喉の邊を刺激する事も無く、從ッて咽喉カタルの類は起りません。 咽喉が焮衝などするのは全く非常に冷な、あたゝまらぬ空氣を口から急に吸込むためで、年々肺病や咽喉病で死ぬものが多くある、その多數をすべてあれから起るのです。 レスピレートルを掛けてあるけば、どうしても口から呼吸するのが不自由であるため自然鼻から呼吸する事が多くなる、それゆゑによいのです。

理論上、これだけでは有りません。 無駄な時には口を閉ぢて居るのが嚴肅をあらはす元になり、口まで開けたのよりいくら見よいか知れません。

錢のかゝらぬ生活をば何うしたら出來るだらうとある人がいふと今一人がこたへて、「譯は無いさ、料理屋で食べて勘定をしなければそれでいゝ」、

（い）破れ蚊帳をかけて　めでたいとぞく

小説

おだ卷

加納雨柳齋著

○其三　恨み泣

てもつれない、そしてにくらしい、いつそ恨めしい……あの戀。戀その戀、此一字から種々の葛藤を曳出心の糸車、そ

の糸がからんで疑ひを織たり、邪推を編だりします。お絹は一封の玉章から濡衣を着せられました。

「分らないのはあの玉章、自分でさへまだ一度も見た事もないのに……それを妾の手からでも取た様に確固な証據ですなんッて……もしや妹がいたづらにあんな物をこしらへたのでは……それに今の繼母さんは中々の意地惡」

…………

と言掛て奥の間の方を一寸と見たばかり跡は口の中で噛殺しました、

「我子ばかり可愛がつて……清ちやんばかり可愛がつて……此間も竹町の若竹へ行た時も（寄席の名）絹と袖は（下婢の名）御留守役だッて……その歸りも仲町から友禪の縮緬を買ッて來てほんとに清ちやんは仕合だわ……阿父さんも阿父さんだ絹にももう一反買ッて行うとさう言さうなもの、妾の方が姉だのに。なんでもかでも家政は皆繼母さんが……あんまりな今の濡衣」……

此時端なくも手飼の猫が來て、何氣なくお絹の膝の上に乘らうとするとお絹は能い不平の遣り所が出來ました

「あゝ五月蠅よッ人の心も知らないで

お絹の不平を一身に引受た無罪の猫、無情にも膝の上から突き落されました。猫は逆鱗に觸れて丸くなつて蹲て居ます。お絹はふり反ッて見るところへ足音が近くお絹の耳孔へ響きました。お絹はふり反ッて見るとすなはち例の美津木欽哉です、お絹ははッと思た心へ忽ち生憎といふ二字が立込みました。包みかねた胸の狹い胸の袋から怒氣の炎が洩れました

「おや美津木さん」

此一言の中には、恨、憎、種々の分子が混て居ますが、しかし美津木にもそれが生平より猶一層どことなく愛らしく思はれます何故でしやう。

「先日はどうも失敬致ました。そしてお清さんは何處へ」

お絹は返事が有ません、只だ何か一生懸命といふ風で考へて居ます、美津木は不審顔です。

「はてな大分天氣が惡いな」

○其四　結婚は望ません

「それぢや貴家からでなくッて絹からですか。おやまア呆れた子ですねエ昨日も種々意見をして見たんですけれど中々の强情でして只知らない……覺がないッてばかり言ッて……ぢや貴家の御持なさる其手紙を少々拜借」

美津木はお安に此くいはれて面目なげに頭を掻きました。如何に彼方からとはいへ己もそれに應じてあまえいた返事迄書て贈ッた爲め繼母のお安に今は己が書いた手紙まで出されて責られました、

「いえ其手紙……手紙はあの燒棄たので……

「いゝえ今此處にも確にもッて居るし妾から敢てお勸申た譯でなくッてなんて貴家只今仰つたぢや有ませんか

一度口外された言語は駟馬も追ふ事能はずとやら美津木は今己の口から此處にあると言ッた事ゆゑ爭ふ事は出來ません。今ポッケットの中から恭しそうに出した戀のそぶ卷、それを惜さうにお安に渡しました、お安は今こそ此手紙で先のお絹の强情の鼻柱を挫かうと思ひました、則ち珠顆を得た心、取退け無盡に當た心、讀て末尾に至て俄に顏色を變てまで驚きました。目の前に富士山でも出來る樣に。その驚いた譯は何でしやう。看官も御推察、手紙を寄た人の名、その名にき印を書てはありますが、しかし正しく字はお清の手跡、それを己の想像の近い處へ引てお絹を間違た事が十分にわかつる、それゆゑに驚されです。今は先の勢も出ません。青菜に鹽、落膽しました、が、忽ち胸へ寄て來たのは飛ぶもつけの幸、何か決心した樣に見えます、

「美津木さん貴家長野縣の御出生と仰いましたが長野は何處です。亭主も長らく長野へ行て居ましたッて……妾は此家の絹が三才の時後妻に來たのですから悉しく知りませんが長野は大變好い所ださうで」……

突然方向違の言語を發しました、美津木は何事を言ふか又己への意見かと思て居る矢先へ此言語が出る事故ぼかんとして呆然に取られて返事も急には咽喉の關を通て來ません。しばらくして

「さ樣です長野は上田の元と縣町に居たのです。幼少の時母が死亡ましてそれから今の美津木へ……實は美津木とは養家の名で」……

お安はなぜかまた忽に微笑を含み、又重て言語を繼で

「貴家に少々御依賴がありますが……聽て下さる譯にまゐりませんですか」で

又此やうな意外の言語を發しました。美津木は薄氣味がわるいです。が、返事はどうしてもしない譯にはいかない、

「何ですか存じませんが……小生で御依賴に應ぜる事の出來ますものなら」

十の八分は吉の返答。お安は一段言語に嬉しみを含んで

「平生から亭主とも談話をして居たのですが、あの貴家も今年御卒業の御様子ですが、家の清も恰度貴家に似合の年。誠に不整な者ですけれどどうか貴家が面倒見て下さる譯にはいゝえ最も御國元へも御相談の上で」……

依頼その依頼、何事かと美津木の胸裏は迷の雲と疑の霧とで鎖されて居ましたが、今此の一種變た結婚の依頼。今年卒業の上は一家を持つ心得ゆゑ恰度能い工合でもありますか、それが蓼喰ふ虫、好不好はあります。美津木は左程までに愛といふ字の向ぬお清、これが姉のお絹ならと思ふゝでしやうとは傍の者の想像、只ゞ當惑して居ます。此時後れ襖を呀然と開て出たのは此家の主人北時森寛治でも。何も言はそ坐に付きそて二人に對する其顔色、何か不平でも言ひさうな擽悔、漸々口の紐を解きました

「その結婚は私しはどうも望みません」

お安は不思議さうに寛治の顔を見詰ましゐ

「それでは平生の御言語を」……

美津木は寛治の一言を大旱の雨

「小生も時森さんと同感です」

お安は二度吃驚、只ゞ口を開た儘。

〇其五　奇遇

今結婚の約を止めた寛治の言語にお安は驚た、その驚る顔を寛治は一寸と見ながら美津木に言辭を向けました

「美津木さん貴家は幾歳の時お母さんに離れなそッたのです。そして欽哉とは御養家でお付なそッたお名でそか」

美津木は結婚は不承知といひ、まゝ今の問に言語といひ、不思議に不思議を重ねました

「はい四才の時離たそれから今の美津木へ。欽哉とは以前からの名で」…

言語簡短に答へると寛治は莞爾と笑て美津木の顔をまた見詰ました

「お母さんの名は郁とは言ひませんでしたか

此一語は美津木の心に非常の感動を與へたのか時森の顔を不思議さうに見ましゐ

「その分らないのは最です、私しが今申上る一條の談話まア聞てください」

一寸煙管の吸からをぽんと火鉢へ落しましゐ

「小生が廿一のとし則ち明治〇年今を去る十九年前長野の

上田へ官務で行て居ましたがその時阿郁といふ女と心安くありとう〳〵其年の暮男兒が出來。欽二と名をつけて當分ハ育て居るとそれから二年程たッて私しの役が昇進した爲め東京へ戻される事ゝなつたので役所ハ手前もある故止むを得ず少々ハ手切金を添て長野に置て來ました。その後は今に至る迄何の音便も聞かず如何したかと常におもつて居たところ……その子はかう成人して現在平生逢ふて居ながらそれを知らなかッたとは……今陰でお前の縣町に居たといふ事を聽て俄に思ひ付いたので……

虚言とも思へぬ寛治の昔語、美津木は其奇遇の意外なるに驚ろきました、お安も今てお清と美津木と腹違の兄弟といふ事が分りましたので落膽しました。

「あんぶら小説見た樣な御談話、然し小生も養家の母に聞ました談話も薄々知つて居ますが誠に不思議は今の貴家の御談話ときッちり符合いたします」。

次の一間に聞て居た妹のお清

「ほんとに浮世はまゝにならぬねエ」

をはり

（ろ）

日向ハ氷とろけて

日向の氷とゝく

流行

流行見本さし糸の解

第一　六角井げた小紋。いづれの色の染め出しでも差支ありませんが、之を下着にすれば上着となるべき亂れた形のものがよろしいです。

第二　針さし。大きさ三寸四方、又は幅三寸、縦四寸も宜い。綿と鳥の生毛（まとに白鳥）。製法はまづ生毛を包んだ蒲團をこしらへるのです。蒲團切地ハ青繻子、流蘇ハ眞紅、青繻子の上へ張つる四角な布は赤天鵞絨、その上へ四筋ぬひわたした物は青地の切地（物は何でも丈夫向をたッとぶ）。それへ亘ッた山形は白絹ハ縫取。

第三　梅の花把。大抵この圖のやうに作れば見くるしくありません。

第四及び第五　櫻および山吹これを花把にする時の摘取方で見せるのです。たゞし一枚長いものは是非ともワタを作るために置かなければなりません。

第六　姫小松の根掛　松葉ハ金糸と緑の糸とを二色組にした編り交せ。幹は綿を大赭で染め、そしてゴムで固めるも

の。

第七　蝴蝶の根掛　絹に紙の裏を打ツた羽翼、色ざしは隨意。

第八　丁子の根掛　銀なるひハ赤銅製。

第九　卓子被の縁の縫取もやう。　布地は赤、縫取の糸色は樺。

第十　すぶれいの縫取。　ハンケチへ縫取るのに宜しいでそ。

第十一、「かの」第十二、「ろね」第十三、「かる」第十四、「かつ」第十五、「のぶ」　いづれもモノクラム。

無半襟の婦人和服

前々號の通ですでにいらつめでも述べました婦人和服の無半襟が流行し出したとハ。　此頃に至ッてますく\あの風は熾に爲ッてほとんど從來の半襟付を壓倒するばかりでそ。正服と褻服との區別がやうやく無くなって來ます。

婦人肩掛

此頃の婦人肩掛の掛やうは偏に年齡の長幼に應して違ふやうです。　まづ大別すれば二十歳以上の婦人は大抵カシミーヤや何かの肩掛、その以下ハ毛糸で編んだ肩掛を用ゐます。その内にも十四五歳以下の少女の肩掛ハ赤、白、黄、緑、藍など色々な目眩い色をいくつも取り合せて編んだ（二三種以上）のが普通で、さてそれより些し昇ッて十五歳以上廿歳以下の方に移れば多くハ大抵三色なハせ、大抵は二種又ハ一種の物が普通で、そして色もまばゆいのは少なく、大方黒、白鼠、淺黄ぐらゐなものでそ。　しかし廿歳以上、すこし更けた方になると皆霜ふりなどの物を用ゐます。　更に色合地質をはなれて掛けやうに移ると、廿歳以上の人は長く掛け、その以下の人は短く掛けます。　二十歳以上の人の肩掛ハ多く羽織と同様の長さ、その以下の人のは多く羽織の半分ぐらゐの長さです。

薄竹色の羽織

二十二三歳以下の婦人にハ通じて不思議に薄竹色の羽織が合ふ所爲か、あの頃中々あの色合ひ羽織が殖えて來ました。

小柳の帶

繻珍の帶ハまたすたって行くやうです。　この頃の小柳のいきほひの凄まじさ、急に呉服市場に頭角をあらはして來ました。

英國新發明粒織木綿
一名　空氣の衣服

婦人服裝についてハかねていらつめでも色々の事を言ひましたが、しかし只に婦人の服のみか、男子の服もとても今日の儘で滿足しては居られません。　男女双方とも、日本服も西洋服も充分の生理に叶ッた物とは言へず、早晩改良は起るわけです。　併しながら衣服の布地、それを先第一衛生に益の有る物に改めれば　いくらか改良の實が一歩進んだわけですそ。　便不便の点が改良するのが此次の着手です。

ところが、此頃英國に粒織木綿商會（セルラー、フローレング、コムパニー）といふものが建ちました。　監理の人はジヨンソンといふ人で、あれでろある雜誌社員がそれに面會して色々問掛けた、それへのジヨンソン氏の答をこゝに載せますそ。

問　實に新工夫のために人間世界の幸福を增し、またその疾病を少なく爲さろうとの御決心は貴い事ですそ。　就てはいづれ學理によつて爲さッた御工夫でしやうか。

答　はイ、全く學理に因ッた事です。　發明も新らしいことですがその理ハ既に十八世紀の頃カウント、ラムフォルド氏が發見して述べましたが、當時は世に容れられませんでした。が、今やうやう行へるやうに爲りました。　あの理で織ッた織物は第一身体の熱を何所をも平均に保つ事が出來、そして皮膚から蒸發が自由です。　粒織と名付けたとほり、織方は空所が粒に爲ッてありますので、蒸發ハ其所から勝手に出來、そして皮膚ハ一樣な溫度の空氣で包まれます。

問　しかし左樣外氣と流通がよければ風邪を引く患は有りませまいか。

答　少しも有りません。　それが粒織の長處です。　粒の中にハ十分寒氣が充ちて而も薄い膜が其處を鎖して居ますそ。　ですから空氣の出入が自在です。　それ故に皮膚を包む空氣は常に身と同じ溫度にあります。　決して寒くハ有りません。

問　何故木綿でばかり御織りなさるのです。

答　誰にもやすく買へるためです。

問　しかし木綿などの植物質の織物ハ動物質のより防寒上劣ッて居るとは人も皆信じて居る事では有りませんか。

答　左樣です。　しかしそれハ木綿の纖維があまり密になッて居るからです。　粒織ではそれ失もありません。　また木綿で粒織を作るのも尤も容易です。　そして永く保ちます。　洗濯しても縮みません。　そればかりか木綿の粒織は重量も

經らムいます。　引括ッて言へばこの織物にハ三ッの長處が有ります　濕さ、輕さ、そして愉快。

問　絹あどでは出來ませんか。

答　それハ出來ます。無論つくるつもりです。併し今日の急務、まづ多數の人に益を與へる決心でそ。

以上、およそ是業の問答をして社員ハ歸りました。　その粒織は白い布で非常に見事な織方との事です。　いま最初ですから何とも言へませんが、兎に角これが成功して一般の人がその惠を蒙る事となてましたらどれほど結搆でしやう。以後記者も怠らず聞次第その後のたよりをいらつ先に載せる心意です。

奥さまが下女を呼び、「糸や、もし妾の留守に高田のお嬢さまが入らつーやツたら妾ハぢき歸ると御背ひ」といふと下女は考へて「かしこまりました。ですが、もー入らつしやいませんければ何と申しましやう」。

雷とかけて

將棊ととく

文藝美術

夜の霧

ディランド女史　近作
美妙齋主人　補譯

よもすがら　しろく　とざすさぎり、
　つかれたる　世をし　かろく　いぶく。
ねむげなる　かはの　ほゝも　なめて
　ろすかある　やまも　かげに　やどる。

ひやゝかに　なづる　ゆびに　きしの
　いしも　みづと　うたふ　ゆめの　こうた。
うすぎぬの　とばり、ぬ先の　ころも
　ひるの　ねも　たえぬ　ねむる　ぞとに。

さやかなる　あさけ　かぜも　しづろ、
　いざや　日も　いでん、世をも　ゆづれ。
あかつきの　やみに　きゆる　ゆめぢ
　たどりつゝ　をれば　とりも　ぞなく。

蝶（てふ）　佐々木光子

あそび＝くらして　いへづとに
をり＝あし　はなや　したふ　らん、
をす　もふづき　と　もろ　ともに
あとを　おひ＝くる　てふ　ひとつ。

朝鶯（あさのうぐひす）　佐々木信綱

なさ　いゝ　さむる　うぐひすの
こゑの　ふほひも　なはかしく
ゆめ　さめやらぬ　たまくらに
うめがか　いこぶ　はるれ　ろせ。

梅（うめ）　竹屋雅子

うぐひすを　さそふ　つま　とも　なりに　けり、
こぞ　ろえ＝おきし　ふはの　うめがえ。

海邊松（かいへんのまつ）　西升子

そもそがち　なみ　こゝもとに　きこゆ　なり、
すまれ　うらわれ　まつかせの　こゑ。

あらば　おぼろよ　たそや
ひとかせ　かをる　うめが　かに
すきま　しらせて　ねやの　なか
ゆめ　おどろかす　はるの　つき、
あらば　おぼろに　して　ほしや。

立春雪（りつしゆんのゆき）　太田みどり女

おほかたの　はるや　きぬ　らん　ふる　ゆきは
きよの　こぞゑに　はな　と　みえけり。

愛の光

その一　最初

私が天へ行つて神の前に立ッて居ると何のために來たと神は私に尋ねました。　私は兄弟の「男子」の事を訴へに來たと言ひました。

が言ひました、「男子が何をした」。

私は言ひました、「男子が私の姉妹に『女子』を取り、あれを撃ち、これを傷はめ、そしてこれを往來へ突出しましたそれ儘て女子は居ます。　男子の手は女子の血で赤くなッて居ます。　それ故私はそれを訴へに參りました。世界は男子の所有では有りません――それを所有するだけの價値を男子は持ちませんから。それ故世界をば私に下さい。　私の手は清淨です。

私は手を見せました。

神も言ひました、「成程手は清淨だ。では着物をまくれ」。

私はまくりました。が、私の足は赤――眞赤です――赤葡萄酒を塗つたやうに。

神は言ひました、「それはどうした」。

私は言ひました、「いや下界は踏む處みな汚れたもののみです。　その上を行きましたなら着物は汚れましやうこの通り白い衣物が。　それ故、拾道をしました」。

神も言ひました、「何の有る所を？」

私は默ッて居ました、そして着物を垂れました。　上衣で頭を包み、そろ〳〵立去りかけましたが、天使が追ッて來るかと恐怖れました。

その二　二度目

その後私は再び天に行きました、私も今一人。　たがひに携へ合ひました。二人とも甚だ憊れて居ました。　われ〳〵の衣服は泥に汚れて重くなッて居ました。　やがて吾々は天門をながめました。　それを開く天使、進入るわれ〳〵。大理石の床を過ぎて神座に近づけば、天使はわれ〳〵二人を相離れさせ、同伴の女子をば上座に、そして私をば下座につかせ、さて天使が言ひました、「前の婦人が來た時には床に血の足痕――われ〳〵が涙で後に洗ッた痕を――殘したから此上に行かせる事は出來ぬ」。

しかし女子は私を見返ッて手をひろげましたので、私も其傍へ行きました。今も二人とも晴天の人。

神は言ひました、「何に來た」。やがて私は同伴の婦人を神に示しました。神は言ひました、「何故に二人相伴ふ」。私は言ひました、「戸外に倒れて居るこの女子を人は踏付けて通りましたが、私は同じく其傍に横はりましたので、女子も腕を伸べて私の頸を抱き、そしてわれ／＼は一途に起上りました」。

神は言ひました、「では誰を訴へるために此所へ來る?」

私は言ひました、「誰をも訴へません」。

神は言ひました、「では何の爲めに來た」。

此時女子は私の手を引き、われ／＼二人の格で言へと示しました。私は言ひました、「われ／＼の兄弟の『男子』に御説諭を願ひに參りました」。

神は言ひました、「あらば己の命を傳へろ」。

私も言ひました、「どういふ御命を」。

神は言ひました、「それは御前の胸にある」。

われ／＼は退からうとすると、天使はわれ／＼と一途に戸側まで來ました。

その一人は言ひました「あイ、たゞ渠等の衣服はうつくしい」。又一人は言ひました「見ろ、金だ」。また一人は言ひました「無矢——それは渠等の顔から輝く光だ」。

これは女子一銭新聞に出て居た文で、男子が女子を困しめ、また之を助けるなどの趣が歴々としてあらはれて居ます。はじめ、足が血に汚されて居、末には男女相たづさへるとは如何にも美事。ことに結末、「顔から出た光」とは何等の愉快…雨晴きて月に逢ふたのも類及びますまい。讀去ッて覺える心の清さ!

現今米國二人の婦人文學者

其一　クラッドック女史

チャレース、エグバルド、クラッドックと名唱り、今日の米國文壇に一方の女王と仰がれて居るは即ちメレイ、マーフリー女史で一千八百五十年に生れた人です。祖父は北カロリナ州から出た國會議員です。女史は年のまだ行かぬ内病氣で跛になッた　その爲他の女の子どもと同じやうな遊戯も出來ぬ、たゞ書見で日を送ッて居ました。されど今日の

クラッドック女史

クラッドック女史をこしらへた原因です。つねはテツチシイに山ずまいをして閑雲の往來する樣あるひは小鹿の啼く聲で心を育てゐ、それが今日のクラッドック女史才筆をこしらへ出したのです。

夕日が向ふの山に沒しかゝツて雲の色もおのづから物寂しく何となくあはれな、其の有樣を谷の縁でたく\/と看て居て遂に練出したのは即ち「谷の星」といふ作です。けれどもまづ世に出たのは「テンニシイ山にて」と題した作で、其の時はまだ處女でした。それから「ハーント」、又は「セ、プロフェット、オフ、ゼ、グレート、マウンテンス」、および其地のいろ\/出ましたが、いづれも俊れた作で。ことに此の女史の長處は雄大で、而して美くしく、細かく書く處です。今はその名は全米國に傳はツて居るばかりで無く、歐洲邊でも知らぬものは有りません。當年三十九歲。

其二　アメリエ、ライヴス女史

アメリエ、ライヴス女史

クラッドック女史　女王の位地を爭ツて居るのを「南國の星」と人に呼ばれるアメリエ、ライヴス女史即ち本名ミセス、チエンラーといふ人です。今年まだ二十六歲、一千八百六十三年の生れで、米國屈指の美人です。文學と美術には子供の時から非常に熱心で、犬を伴ツて郊外を散步するのを何よりの樂しみとして居ました。性質閑靜を好み、さわがしい夜會などには心が進まぬ方で、靜に考つて詩文をおもふばかりです。そして感情が湧いてくれば忽に筆を把ツてすら\/と書下すばかりあまり草稿は作りません。はな、二三年前までは誰もアメリエ、ライヴスの名を知りませんでしたが、一旦無名でアトランチック、モンスリー雜誌に投書してから世間の批評家に目に注けられました。それからファリアー、ラス、オ、ハイピンジ、ペブウォルス」、「ナース、クラムペッツ、ストーリー、及び「ストーリー、オブ、アー ノン」などを書き、いづれも好評を博し、今のところ前のクラットックと花を競ツて居ます。

ある田舍者が宿屋へ泊り、朝梅干に白砂糖を掛けたのを出されると、つく\/見て「ひどい奴！梅干に鹽をつけて食へれるもんか」。

佛國現今 文學大家アルフォンソ、ドーデの近事

ドーデ氏は一千八百四十年の生れで、此年四十九歳。むしろ瘦形の中長です。摠の美くしい容貌は坐ろに面會するものをして英國の詩家テンズン男爵を憶出させます。人が評して佛國のテンズンと云ふのも至當です。左の眼が近眼であるため常に片目鏡を用ゐて居ます。氏が物を叙して感動を強く讀者に與へる事は氏の友のゾーラと同様で。しかもゾーラより又すこし清淨の分子を含んで居ます。しかし穿破る處の筆勢は皮膚をわける銀の針のやうです。子は二男及び一女の三人あります。長男は今年廿一歳、醫學を修行中で ドーデ氏は大自慢です。次男はわづか十一歳。また長女は三歳です。ドーデ氏が長男を教導する處は實に心地よく一途になッてラテン詩やグリーキ書を讀みます。毎に人に語ッていふには「私はこの子が十分専門に通じた上で無ければ大學へやらぬ」と。丁度世の普通と反對です。夫人は只にこの詩人兼小説家の世話女房であるのみか、また俊れた才女で、次男にドーデ氏の作などを説聞かせ、またドーデ氏の新作にも説を容れ、改竄する事も有りますが、いつもドーデ氏は喜んでそれに從ひます。次男は夫人が一手で丁度ドーデ氏が長男を教育すると同様に導いて居ます。あゝ、われ〳〵が今まで見た處ではあの家内和樂を充分に得る人はこのドーデ氏と英のウォルヅウォルス位でしやう。兎角詩人や小説家の天地はこと〴〵く鬱憂の伏霧に包まれて居るのが多い世の中にこの平和は千古の美事です。

ドーデ氏の愛する小説家はバルザックで、好きな詩人はシエークスピーアですが、氏は英語を知りませんから仕方なくユーゴの譯でシエークスピーアを讀みます。ドーデ氏の諸作の賣高我聞くにLe Petit Chose 十五万部、Jack 五万六千部、Numa Roumestan 十五万部、Le Nabaf 十六万部、Sapho 十七万部、L'Immortel 十三万三千部。あの中ドーデ氏の自慢の作はヌマ、ルーメスタンです。

梅櫻都錦繪 二幕目

立花家かをる作

本舞臺一面の平舞臺上手一間の床の間コヽニ好みの軸を掛け大なる花瓶に菊の花をさしあれに次に地袋違棚ありこの側襖の出入り日覆より中欄間を下ロし平舞臺に緋段の敷物をしきつめ都て花垣閑室の体宜しく上手に先太郎袴羽織にて据へ

少しへだゝりて同じ栫なる芳雄木曾川瀬平酒井忠國南條民三城戸孝吉壮士にて幷よぞ居ならび前に地圖書類を置き各々評議の摸様宜く静かなる合方にて引返そ

(先)先達てより我々の色々苦心の効有つて計畧漸くとゝのひたれば時機を察して彼の地に渡り實行なさん手續はかくれ如くに定むれど諸君ハ如何に思ハるゝや」ト 書類を皆々に示そ皆々感心の仕打宜しくあつて(芳)何から何まで注意周密(瀬)到れり盡せる實施の方法一同感服(皆々)致してムる(先)立川君と木曾川君は大坂表へ密に下り何も同志をかたらむて僕の下坂を待たるべし僕ハ愚妻と共々に當地の様子を委細に探ぐり兼て試驗をこらしたる爆烈弾を携へて遂ひ〳〵集まる吾党と思む〳〵に出發なし一所にあつて渡海の上」ト書類地圖を示し色々仕打ある(瀬)然し夫には莫大の入費の支出が第一肝要(芳)僕も甚だ心配せしが幸ひ秋田富三より二千圓ハ調達の目的あれば足らざる所は評議の上又詮術もあるべしと少しハ安堵いたしたり(忠)かゝる金額ある上ハ我々共も力を盡し(民)もじも十分ならざる時は大事の前の小事とか(孝)其の目的を達せんには富豪れ家に押入りて調達なさんも一つの手立(瀬)いや勇ましき君等の一言「大功を細瑾を顧ミず花垣君　如何でムる」これよて花垣を思入あつて(先)名譽を知らぬ君達と事を遂げんは覺束なし(瀬)花垣君如何なる仔細か　承りたし」ト立腹の思入にて忠國民三孝吉と共につめよる(先)らゝる君等と知らずして同盟せしは殘念至極(瀬)なんぞ(忠)餘りと言ハ(民、孝)無禮千万(先)抑此度れ一條を檄文にも記せる如く正義の爲めに身を擲て朝鮮國の獨立をはからん爲党の企ならずやさすれば諸君の徹頭徹尾只守るべきも正義れ二字然るに費用を補ふに人の財を奪ふなど以の外なる不義非道……(瀬)古より非常の事を企つるには非常のと技爲すも害なし(孝)軍用金を集むる爲め一旦富家より借り受けるは英雄丈夫の恥ざる所(先)君等の如き政党の多くあるれは國家の大害(瀬)やゝ(先)今より徒党を脱せし上思ふが儘ゝ勝手になされ思へば君等は我党の名譽を汚す御所存か(國、民、孝)何にしに以て(先)然ば思ひ止まるか (國、民、孝) サアそれは(先)脱党するか(瀬、國、民、孝)サアー(先)サア(皆々)サアーと操上け宜しく(先)正義と自由の犠に身を擲ちたる先太郎強盗竊盗は嫌てムる、ときつはりと云ふこれにて皆々感心の思入れ芳雄は双方を取りなすことを宜しそ　(瀬)花垣君

の意見の段々(國、民、孝)一同恐れ入つてムる(先)夫にて僕も大に安堵致前よりの無禮の段平に御容赦下さるべし(芳)かゝる非常の激論も皆吾党を思ふの餘り僕ハ反て感心せり(孝)少壯血氣の吾〳〵ゲ短慮の程ハ恥ぢ入る仕儀(國、民)面目次第もムりませぬ(芳)僕ハ決議の摸様に依り木曾川君と坂地に赴き同志の諸君と熟議をとげ東西密かに應する所存(忠)謀計万事は諸君に任せ若し尋常手段ならず(孝)干戈を用ゐる場合となれば(民)日頃の武勇を現して俀人原を取挫ぎ(忠)朝日に香ふ山櫻我敷島の魂に日頃我慢の支那人が鼻を明かすは愉快千万と皆々ゾク〳〵勇み立ちよろこぶ(先)實に勇ましき諸君の一致本望遂るは今見る如し先日よりの集會にて評議も大方決したれば何には無くとも粗酒を酌み交ゆる〳〵と談し申さん」と 柱に仕掛ある「リン」を鳴す此の時與より序幕の淸子島田かつら上品なる拵にて酒肴の道具を持ち出て來り程よくならべ皆々に向ひ(淸)コレハ〳〵何れも様色々との御心勞乍憚ら察し申し升すと宜しく挨拶ある(芳)婦人の身にして夫を助け今度の義擧にくみせらるゝは天晴婦女子の亀鑑でムる」と 皆々 色々褒めるとある(先)どうぞ諸君も御遠慮なく(淸)召し上かつて下されませ」淸子ハ皆々に酌をする皆々酒を飲むと宜しくある先大郎ハ地圖書類をかたつけ懐中より連判狀を出して皆々に示すこれにて皆々悦ぶと宜しく互ひに面を見合して笑を道具替りの知らせ酒宴の摸様宜しく合方にて廻る

ゟをる曰く拙作正本もいよ〳〵三幕目を大詰先といたし升れば其の御つもりにて御覧の程を願ひ升すもう一幕の御心抱です……次號にはタップリ載せるつもり故今回はこれで御免を蒙り升す

雜纂

外國人の日本婦人批評

ポオル、モオル、パヂエツト新聞の記者が日本婦人を評した大意は左の通りです。

日本婦人ハ日本の「美」の粹で、可愛らしさかその長處ですが、しかしわたくしが評すれば……疎く評するのは并でハムミングバルドを解剖するやうですが……淵順、優美、および慈悲に富んで居て、これらの諸美備をば、むかし羅馬人が言つたとほり、一つの固有として居ます。 もし人が日本婦人の姿を心に描いて見たいなら、 愛情の波満々とした處

女らしい笑顔、露にも塵にも汚されぬ心、並びに小供などに及ぶやさしさ、漆のやうに黒い毛、及びなよ〳〵いふ絹の衣服、これらを思はなくてはなりません。これらが實に日本婦人の固有です。

日本婦人の性質は「從順」の一言で言盡くせましやう。一時代までは「三の務」が宗教上（儒教を言ふのです）婦人に宛嵌らされました、即ち、三從の教です。「山羊も跪いて乳を呑む」とは日本の諺で、獸物でも親を敬ふとの意です。夫をえ養むのも、それ故、父母の心任です。教育は讀む事、書く事、琴三味線の調べ及び踏舞、高尚な文學、殊に詩學（和歌の事です）茶湯、及び活花——いづれも非常に開化した教育、しかし益の少ない。踏舞は男女の小供によく教へます。富家には踏舞の教師が毎日來て教へます。多く上流社會です。中以下では是ほどにつとめません。やがて其内に婚禮の時となります。

夫を持ッて齒を染め、眉を剃る風習は只わずかに今は片田舍の下流に殘るくらゐですが、日本細君の身ほど狹いものは有りません。・夫は誰とでも交際しますが細君はさうでなく、夫は外人と交際して心も進歩しましたが、細君はさうで有りません。

夫婦の間の愛情で互に性質智識を相愛した所から起ッたのは實に日本に罕です。「さびしければ友とし、相談するには父とし、病めば母とし、世の憂にはなぐさめとする」、この言語の理想を日本男子は知りません。真正の愛は實に日本に有りません。フヒテなどの艶書を日本語に譯しても見る人は有りません。

日本の婚禮は契約で、決して宗教法律の範圍に有りません。離縁はまた日本でもシカゴより容易ですが、それは理論だけで實にその間を支配する家事の關係が破鏡の數を少くします。上流にあればある程、離縁の障碍は多く、妻も政府へ夫の不法を訴へて妻から離縁を言出す事が出來ます。しかし日本婦人の位置も東洋諸國の中第一等の高さです。

更に今後の日本婦人に評を下せば非常に望が有ります。今日の日本少女はわれ〳〵のやうに學校へ通ひ、英語、歴史、地理、文學、理學幷に西洋音樂、及び殊によると經濟學政治學を學びます。この有樣で推せば行末も日本男兒が進歩するばかりで無く女子も同樣に進歩しましやう。

評　一應間違のない說、しかし論點を違へて西洋人が日本人を見る感情に就て言へば、この一篇でも分解

ります、まだ日本を輕蔑して居るところが。

東京盲啞學校教諭及び啞生の書状

いらつめ第二十號に於て記者は盲啞學校の事業を掲載し、その雜誌を同校教員小西信八氏及び啞生の方々に贈ました。然るに早速小西氏から左の手紙に添へて啞生の方々の禮状をくださいました。

其一

「私共（私）は貴君を存じ申さず候處見事のいらつめ本の（廿）一冊御贈り下されあり難戴頂（頂戴）仕候處（仕候）貴君（貴君ハ）如何に候御仁に候歟御禮旁伺上候

明治二十二年
二月二十一日

東京盲啞學校生徒
江島安之助

成美社御中

其二

「昨日御社よりいらつめ第二十號を御惠送下され有難く頂戴仕り候間御禮申上候

二月十九日

東京盲啞學校生徒
高木愼之助

成美社御中

其三

「小生儀者先日（元來）貴社の方々少しも御知せらぬ（御知り不申候）に付（處）此程成美社よりいらつめ（此程いらつめ）第廿號を御郵送下され度候間（下され候趣）小西先生より承り難有頂戴き（頂戴）候間此頃（此段）宜數きふ（宜敷）御禮申上候謹言」

二月廿一日

東京盲啞學校生徒
吉川金造

成美社御中

右手紙の中、括弧の中ハ添削した文句です。兎に角これほどに用の足りるまで教授された人の苦辛實に想ひやるのも愚です。慈善の王襟を正しくして書記すべき事」

露國婚姻の風

露國で婚禮する時にハ矢張り婚禮の莚も開きますが、しかし一種かはッた風ハ媒妁の前で花嫁がまづ髮の毛をすこしばかり切つてそれを花聟へ與へると、花聟は又綠玉石入の銀環巴旦杏のケーキ、及び鹽せパン、これら四品を嫁に與へるの

です。　鹽とパンとケーキは日用の食品の權を與へることを示すもので、また髪の毛は婦人の心、銀環は男子の魂を象ッるものです。　この儀式が濟めば最早夫婦一体で、双方は承諾が無い以上は親でも君でも縁を離せません。　離縁の時には夫の方が妻髪の毛を却し、また妻は方から環を戻します。

露國人……殊に北ロシヤ人……がこの環を大切に思ふのは非常なもので、貧乏で高價な緑玉石や銀を調へる資力の無いものは錫に何か青い石を入れる環をはくり、それを送るほどです。

活きた卵

懐中時計の始めて發明されたのは今より四百年前西暦千四百七十七年日本の文明九年のことで獨逸國ニュレンブルグの掛時計師ピーターベール氏が發明者で當時では世界不思議の一に數へられました。　一番最初に出來た懐中時計は一年の日子を費したそうです。　一日に一時間の狂が生じ一日に二度宛卷かなければならなかつたのです。　其價は今日の金に積つて金貨千五百弗に當るそうで其形は卵形で其大さ家鴨の卵程であつたと申します。それだから其時分には此懐中時計に「ニュレンブルグ」の活きた卵といふ名がありました。ゼンマイ仕掛の時計は千六百五十八年我万治元年に博士フック氏の發明でアンクル仕掛は是より十年後延寶八年にクレメント氏が發明で此頃まではまだ卵形でしたが今日のやうな恰好になつたのは千七百二十四年我享保九年のことであります。

喪服の色

喪服の色は國によりて違ひます日本の喪服の色は白ですが西洋服の流行と共に喪服の色まで外國を眞似て黒になりました。

黒色　是は歐洲各國幷に古代の希臘羅馬にても此色を用ゐました。

焦茶　土色に擬したるものにてエチオピア人之を用ゐる。

白茶　枯葉色を擬しゐるものにてペルシヤ人之を用ゐる。

瑠璃　青空の色に擬し死者の昇天を祈るの意にして小亞細亞の諸國之を用ゐる。

青色　亞細亞のボッカラに於て用ゐる。

紫色　王室の色と定まりて佛王の喪に之を服す。

白色　日本支那埃及及印度の婆羅門宗徒の喪服の色。

黒白ダンダラ　南洋群島に於て用ゐる。

かやうに思ひ思ひに違ひますら赤色の如き派出な色に用ゐず或は土の色或は枯葉の色或は空の色に擬して色こそ變れ何れもじみなるものを用ゐるは野蠻人も開化人も今も昔も感じは一と見えます。

「あの小間物屋は大層繁昌するが何故だらう」。「原因が有るのさ」。「どういふ」。　主人が利口で鸚鵡に『あら美しい』と言はせるのだもの」。はゝア、それで婦人客が多いのだね」。

（に）　屋根は瓦とろけて
木曾義仲と　とく

小説

繡鴛鴦　　麹亭飯人

第一回　珍らしき畫家の熱心

「今夫れ吾人モリエールの院劇を観て、其のタルチユッフの所爲を見、若くはバルザックの稗史を観て、其のベットマル子ッフの所爲を見るときは、案を拍ちて奇と稱せざる莫し、然れども其の感服を致す所以は、決して此れ等の人物の所爲上に在らずして、作者の慧眼能く此の種々の性質の短長を曲さに看破して、之を叙述せしことを感ぜるあり」……

「妙々」と二ツ三ツ叫びながら深く感ぜる所ある思ひ入をにて、やがて目を閉ちて默然たり。若し斯る處を雙びが岡の法師に見せたらんには、「打ち解けたれど心にくゝ長閑なるさまして、机の上に文を繰りひろげて居たり。如何なる人なりけん尋ね聞かまほし」とも云ふべからん。いでく作者、ドクトルノ技倆はあらねど、試みに先づ解剖すれば……年は頃は二十ばかりなるべし、顔は面長にして、色は少し淺黒けれど、鼻隆く、眉秀いで、口元尋常にして何となく愛敬を含み、髪の毛は至ッて濃くして、爲に幾分か縮れ癖なきにあらねど、梳櫛の營養行き届くにや、黒々として、光澤あり。眼はあまり大ならざれども、眥の少し擧りたるは又何となく俊秀の風そなはれり。且眼球常に坐りて、妄に動かさざるを見れば、又慎重の人たるを知るべし。衣服は極めて質素な樣にて、メリヤスのシャツに屑糸織の薄綿入を着、唐縮緬のへコ帯をぐるくと巻き付けつ、されど物數寄と見えて、室内の装飾品より日用の器物何くれとなく整たり、室内は疊わづか六

疊なれども、自から閑雅にして趣あり、先づ東手を詠むれば、一間の床ハ間ありて、應擧がものしたる鴛鴦の畫軸を掛け、置き物には何時代に何人の刻めるにか、木造の蝦蟇を安置し、其ハ傍には猶二三の彫刻物ありて、いづれも今世の品とハ見ず。又床柱にハ最ふるびたる銅製の花籠を掛け、それにはまだ蕾ばかりなる桃の枝を挿したり。床の間の次は唐木づくりの違ひ棚ふて、其の上下には誂らひ向きの小さなる押入あり。其が襖子に畫がけるハ元信が得意の筆に成れる韓子遊びの圖なり。西の一方ハ壁にして、一面ふ書棚を以つて掩はれ、北ハ唐紙にして之には書を認めたれど、無落欵なればゞ、何人の筆か知るに由なし。但見れば二方の鴨居に、凡七八面の扁額を掛けたる、其が中にハ東洋畫あり、西洋畫あり、或は人物を畫がき、或ハ動物を描がき、采色を施せるもの、淡墨のまゝなるもの、各得意の技倆を見はし、唐の王維が墨畫は、探幽が石盤摺の左を占め　伊太利のミケランジが油畫は、荷蘭のルイスダエルが寫眞畫の右に隣れり。さて南も中窓にて、其の鴨居にも一ツの額あり。これは四尺程の大さにて、外面ふカラスを篏め、中にハ蝶の種類の有らん限りを集めたるにや、大きなる、小さなる、美きもの、醜きもの等

あはれや皆陰ぼしにされたるまゝ。針もて體を刺れてあり。其の下には最手摺れたる紫檀の文机ありて、古梅園の墨受け好き端溪の硯ハ、其の右手に牌を取り、富士山樣の硯屏を植とし、ピラミッド形のインキ壺を臺場と頼み、鋒尖鋭き唐洋筆は筆立に雜居して、其の傍に侍りぬ。縞甲斐絹の坐蒲團に端然として坐を占め、さて此の机ふ憑りて、何か考ふ所あるが如きものハ即ち此の書齋の主人公なり。容貌を以て推せば極めて溫和ふして思慮深きものゝ如く、衣服を以て見れば、極めて質素にして邊幅を修めざるものに似たり。然るに疑がもし之は室内の裝飾なり。器具なり。殊に扁額のノベツに掛け連らねて、さながら神社佛閣の鴨居めきたるは、中々ふ雅致を損して人を俗殺するの嫌ひあり。既にして主人は半讀みかけたるユージエーンヌ、ウエロン氏の美學の巻を掩うて背後の扁額を顧みたるまゝ右さま詠めつゝ獨言するを聞けば、

「作者の慧眼善く此の種々ハ性質短長を曲ふ看破せるの一言正に茲にある。なれど然一樣にも云ひ難ひ。斯う幾つも列べて見ると、各妙處不妙處がある。ラフアエルの平澹明白なる手法ハミケランジ、レオナトル、ヲンブヲンド等の及ばぬ處。又是れ等奇拔險怪の畫家の手法は、流石の

ラフアエルにも學べない處。王維の手法の平談、東坡の筆法の奇抜、どれも是れも合せて時に從つて出没するといふやうな豪傑は無いものか知らん。あゝ、考へて見れば馬鹿〳〵しくなる。親が勸めても妻をも貰はず、凝り固つて勉強しても足かけ六ケ年の間に得たものは、僅かの鴛鴦の一畫法ばかり。あゝ詰らない。胸が夢邪苦邪して來た。

主人は獨言しつゝ、少しく腹立しさうに中窓の障子を引き開くれば、庭の面にて半咲きそめたる櫻花、そよ〳〵と吹く風の電氣に馥郁たる香を鼻に通じ、池の汀の柳は青々として、昨夜の雨のいまだ乾かぬさま、先づ眼に付きて哀れなり。是に於て彼の胸の夢耶苦耶もいつしか失せて、心おのづから長閑にあり行くと共に、又さらに畫意や生じけん。

「柳櫻をこきまぜた安排實に妙だ、『春の錦』と誰やらが詠んだ歌……無形の歌でさへ寫景の妙はあるものを……これが寫せないといふ事があるものか」……

つと身を起して違ひ棚より繪の具碟を取り出を折しも下婢にやあらん、いそがはしげに馳せ來りて、唐紙を颯と引きそべらし、

「若旦那、レース學校の方が五六人只今お出でに成まして、急ぐから寄らないが、今日は急の思ひ立ちで、是れから花見に行くのだが、若旦那がお出になるか聞いて見て呉れと仰しやつて、玄關に待てお出なあります。如何遊ばしますか。何ならお出あそばせな。向島は今丁度宜いと、見て來た人が云ひますよ」。

「困ッたなア、今畫き始めやうと思つてゐる處だのに」。

「あなた、然お凝り遊ばしちやアお毒に成りますよ。お庭の景色……それは何時でもお畫きなさる事が出來ますぢやございませんか、其んな事被仰らずにお出であそばせ。」

「眞個に困つた。えゝ仕方がない。幹（下婢の名なるべし）それぢや行くから、慈母さんに然言ッて羽織を出して貰つて來てお呉れ」。

「お衣し換へあそばしませんか」。

「着かへなくつても可い、只羽織丈持つて來てお呉れ」。

幹とやらん呼ばるゝ下婢は了承して出で去りつ、主人の同伴すべき旨を待ち居る人々に告げ、やがて黑七子の羽織に博多の帶を持ち來り、

「あの奥樣が着物は兎に角、へこ帶はあまり見悪いから、お羽織と帶丈でもちやんとして往くやうにと被命て、之を

出しておよこしに成りましたらら、おしめ換へ遊ばせあ」。

「よし、よし」。

斯くて支度を調のへ、玄關へ立ち出でつゝ

「どうもお待ち遠でしたらう。今日は又どうして此様ふ急に……さうでしたか、それはく、さア其れぢやお伴致しませう」。

斯くて打連れて門外へ立ち出でんとする時郵便脚夫ハ表札を見て疑がはしげふ主人の前へ進みより、

「一寸と承たまとります、此方様は春山芳香と被仰りますが、春山愛花と仰せられるのは矢張てあた様の事でございましやうら」。

「町名番地も同じ事ら」。

「ëい、同じ事でござんますけれども、西片町十番地ハ廣うございますらら」。

「十番地なら己の事ぢ、おやア己が貰つて置かう」。

「阿郎さまが春山さまでございますか」。

「左様」。

脚夫は其の人を聞いて手渡しにそるを、受け取りつゝ打ち返し

「あゝ、是は學校の生徒ぢ、よしく己ふ相違ない、又レース氾下書かあ」。

と封じも切らず其のまゝ袂へ入れ、四五人の知己と袖かい聯ねてぞ出で去りける」。

（ほ）　荒駒とかけて

われ茶碗ととく

批評

明治唱歌第二集及び幼稚の曲第一集

いづれも大和田建樹氏の作で中央堂の發兌です。過日もいさゝか火に於て思ふまゝを申した處、更にまさ馬頭に米嚢花を見るのは如何にも嬉しい事です。細評はいづれそゐ心得でそが、しかし此處で一言の評をそれば明治唱歌第二集は以自身の作のみを集めた事、および道義の觀念が一集よりは比較して多くあッふことゝの二つ、これが大和田氏の詩學におらはれゝ一段の變化です。いづれも感服の至り、如何にも——道義の念の方あど殊ふ——そのは決心をはつゝけになるのを願ひます。比難すれば批難する箇條は有りますが、幼

稚の曲など家庭の教育に川おれば至極よろしい事でしやう。

産科婦人科研究會月報第一號

東京日本橋區矢の倉町十二番地産科婦人科研究會發兌。櫻井郁二郎、楠田謙藏、櫻井三之助氏其他産科婦人科に熱心な人たちの演説筆記です。從來産科婦人科研究會からは臨時報告書を發行して居ましたが、例會の演説談話などの數が増加したゝめ終に雜誌として廣く世に賣る事となりました。近頃有益な實學の雜誌、この類の發兌は實に喜ばしい事です。中には總べて産科及び婦人科に關係した事のみ載つて居て、ちと專門に傾き過ぎたため、俗人は時〻わかりにくい處も有りますが、しかし、一家の母ともなり、また母となつて居る人たちは讀んで決して益を得なくは有りません。

美術園

美術一切に關した事を記した一番駈の雜誌で、行末望を屬する處もありますが、遺憾なのは記事の材料がすこし疎漏にあつて居る事です。第一號にある五岳の梅などの彫刻は一種の新体で、中々面白く見えます。あの類の彫刻風をばやがて發達させたら餘程いゝ事でしやう。只、しかし楓湖氏の風前月夜の梅、意匠といひ配置といひ、毛頭も申分は有りませんが、彫刻の段に至り、薄隈であるべき處を一面眞黑にさながら土藏の壘塗を見るやうに爲れたのは恐ろしい難です。是眞翁の意馬心猿は一寸漆畫のやうには見えますが、しかし更めて褒るだけが野暮です。さて最後の裸体美人の圖、この種類に就ては美妙齋も恐ろしい攻撃を受ける犧牲となり、結局裸体を美で無いと言つた説には感服せずに了りましたが、しかし、この裸体像に就ては聊か申分が有ります。この像は「畫」といふ覺悟で出されたのですか、又は「圖」といふ心で出されたのですか、後の心で出さきものなら別に難は入れず、只充分に骨格のよく出來て居るのを賞美しましやう。もし之を畫といふ御覺悟なら、斯う言ふより外は有りません。あれは「繪」で無いと。決して繪の体裁をは備へて居ません。以上は第一號の略評です。

さて第二號に移ッて言へば有益な文章は甲冑の沿革と彫刻品早取法及び華手書奬勵案この三つだけです。甲冑沿革史は勞力の掛ッた物でも有りませんが、兎に角有用ですが、望む事は甲冑沿革史は古物保存の意から書いたとの考を始終抱いて置られたい事です。次は彫刻品早取法、これが第二號での賍毒です。華手の文も有用では有りますが、酷評す

れば既に人の認識した事を言新らしく言ふと言へます。現に近頃甚手書ハ折々出て來て居ます。魯文翁の醜美かゞみは何の爲になるか分かりません。秘密の婚姻とか云ふ小説、ある程小説も美術でしやうが、然し美術雜誌に小説を掲載は記者ふは大不賛成です。

給の方へ移れば清親氏の猥褻衣を裂く圖、その猥褻の腕は如何にも苦心の痕が見へて、且つ上出來です。

色々言ひたい望も有りますが、またそれ折々に言ひましやう。一號二號之評は右の通りです。美術園發行所ハ京橋區瀧山町の天秀社。

〰〰〰〰〰〰

都の花第七號中大槻如電居士の無花果双紙

大坂 琴水女史

都の花第七號にある如電居士の無花果双紙ハ何といふ作でしやう。まあとに驚入りました。

双紙の中の阿兼さんの言葉といひ、阿夏さんの挨拶といひ、大坂言葉ハまるで皆噓です。もつとも三昧道人の嵯峨尼物語にも大坂訛は澤山有ます。しかし、あれは本文に強く關係が有りませんが、（以ゝ）とは決して申しません。折が有

つたら三昧道人ゟも一本まゐるつもりです）。それとハ違つて無花果双紙、あれは如何ある御単見か、地の文は一句も無く、まるで言葉ばかりです。ですから言葉が間違つて居ると實に工合がわるい。そも〳〵如電と云ふ人は何處の御方です。まさか大坂人でもありますまい。朋友とでも相談して？琴水は生れて本年が十六歳、相かハらず大坂に住んで居ます。ところで左にその間違つて居る件々一々をぬして御目に掛けます。實その、この文も大坂なまりでと思ひましたが、すあし理由が有るので矢張東京語にしました。

一番はじめ「おや村山さん いつ御出やした」。これが双紙の中での上出來です。大坂なまりでは「おや村山さん いつ御出やアたん」。これがほんまです。

「あの東京では誰方さんも御變りおませんか」。わたいハえらう貴方に逢ふうおました」。—（九、上）。これも大變まちがひが有ります。正せば 一東京の御方もぜなふも御變りはゴアヘンカイナ。ワタシも一ぺんあんたハんに御逢ひまをしてお話もいたしふうゴアスえ」とでもあるべき筈。

大坂でハよく「オマス」といふ語を使ふ。しかし、これ

らの場合には決して用ゐまそ。畢竟「ゴアス」も「おまそ」も固同意味「御座候」の意なり。しかし、口に出そ場合はちがい升。如電子はその一を知ッたばかりでそ。

まゝ「サン」も少しく「ハン」とは違ひあり。前段の場合には「ハン」を用ゐます。「私」はまた「ワタクシ」、「ワタイ」、「アタイ」、「ワタシ」の四です。前段には「ワタシ」がよし。如何ある親密ある男女の間柄も夫婦あどを除くの外は人に向ッて直に「ワタイ」と吐き申さそ。要そるふ「ワタシ」は上品で「ワタイ」も下品です。右にて如電子もすこ去はわかりましたらう。

其次、「小夏は往ました」——（九、下）。この意味更にわからそ。「いに」とは引かれしの意か、脱籍の意か。大坂ではこ左は申さそ。ことに「マシタ」とは此處では申さそ。脱籍せしならば「引かされましたし」、これ事實あり。

その次、同四行「仮客さんに引されていあれました。あんあに逢たうて〳〵あらんいふて居ました。さうもあらんであァ一月を前に廣嶋へ往ました」。これとても大ある間ちがひ。一々評するは面倒、直に直して見ん、「下の仮客に引かされてあァ…まアおんたに逢ひたい〳〵言ふてましゝ。けぜ、そんな譯にも以ゝエそ、しやうこともあ去に一月程あとに一處につれて行かれましたそ。」

およそ是等も末の末の段、もッと惡い處は澤山ある。都の花比購讀者は大坂中に千人や五百人はあると以ふ事を如電居士ふ知らせてやりさい。

これまで日本人の小說家で上方語を使ッた人は（大坂の新聞小說は格別）自分が知ッて居る內では春のや君のみです。しろし、すこしも間違は無い。兎に角あの双紙は至局拜見の上はまた〳〵惡口申しましやう。もし〳〵如電君、あのいらつめを讀んだならさゝァ立派な返答して見あそい。琴水は人間普通の生涯がまだ三十五六年ありまそ。逃げも隱れもいたさぬ。如電君、さらば、〳〵。

琴水孃ユ申上げます、大層の御長文、それを節畧するのは失禮でしたが、餘白は無いため仕方なく畧去ました。けれど御草稿は秘藏して置きます。記者がしゐ勝手は御容赦を願ひまそ。

いらつめ記者

ある男が寢られないと言ッて居ると一人の淑女　斯う言ひました、「あなた御著述の小說御持ちですか」。「はィ」。「そんならそれを御讀みなさい。あたし一度讀みましたら一枚讀まぬ內にねむくなりましたへ」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

生活の程度

天保老人

「此槌は福を打ち出す槌ならず驕る頭を毆く賽槌」とは最も古めかしき諺のあるか此頃は文明開化の世となりて大黒天も古道具屋の店前に蒙塵するの世の中なれば驕る頭を毆く賽槌もいつしか行衛を失ひ驕り方体贅澤三昧綿衣は變して羅紗は洋服となり一汁一菜の疎食は進んで「ソツプ」「ビステキ」の西洋料理と化し木造の平屋倒れて煉瓦の三階起り琉球表の疊廢せられて舶來の絨氈獨り其美を專にそ出つるには「シガー」の烟に捲れて黒塗は車に駕し人ては葡萄「シヤンパン」の美酒を列て錦繡の椅子に凭る上は公侯貴人より下は勞働に衣食するものに至る迄夫々分相應力一杯の贅澤を盡すは田舍と先祖傳來の習慣を墨守する下等社會は暫く措て問す都會の新空氣を呼吸する一般人民の傾向なり昨年一圓にて買求たる品物には今年二圓を費し今年二圓を費したるものは明年將に三圓を投せんと年々歳々其は歩を進めて何處か止まりか何時が終りかを知る能はす之を譬れば生活の程度進めりとや言はん之を毀れば將來の慮無しとや稱せん此の如きの有樣は賀すへきか抑も亦弔すへきか文明開化の徴候なるか抑も亦社會腐敗の萌芽なるか人民の快樂を增進したるものか抑も亦必要なる快樂を減して無用の快樂に向けたるものか

實用は學問に先つとは一般の事實とは言ひ乍ら昔の經濟を談するものは口を極めて驕奢の弊害を論したれとも今の經濟學者は只原因は結果の關係のみ目を呉れ世人か驕るを驕らさると左樣なとにて一向頓着せす醫者の不攝生論語讀の論語知らすに對して更に一個の好類例を加んとす信に歎するに餘あり。今夫普ねく世間一般の狀態を窺ふに工業商業に資本を投して千金の利を攫せんとするものは且らく措て問はそ心身は勞働に依て生計を營むものは之を衣服に費し之を飲食に費し之を住居に費し暫くして復一貫洗ふか如くなるもの比々皆是なり偶々少しく貯蓄の念あるものは之を卑劣とし之を吝嗇とし之を不見識となして共に伍を同ふせさるか故に是又社會の壓制を受て遂に一般は慣習に感染するを免るゝ能はす。抑も今日日本人民生活の程度は資本の額に對して權衡を得たりとなすか歳入の多寡に應して適當の比例を得りとなすか。試に歐米の諸國に於て人民の貯蓄する金額及人員を以て本邦に比較せば甚し思半に過くるものあるべし。衣食住の快樂は余輩

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

之を好まさるに非すと雖とも爲に必要欠く可からさるの費用に困難を生せば快樂抔得たればとて何かせん。外形の美麗を外人と競ふは余輩之を欲せさるに非すと雖とも內實の力に非常の逕庭を生せば外人と競ひたればとて事に益なし。

今日の日本は多事の日本なり。改良すべき事物擴張すへき事業累々として枚擧すべからず。「プレデリッキ」大王曰く戰爭に三個の要素あり第一は金錢なり第二も金錢なり第三は金錢なりと。夫金錢の必要なる豈啻に戰爭而已ならんや。日本舊より新に遷るの一大時期に際し多からさるの資力を以て五倍六倍の資力に匹敵し此一大困難事業を遂けんとそ其難澁言を待たさるなり。金錢は天より降らす地よりも湧かそ其降り其湧くは只貯蓄の一淵泉あるのみ。今日日本人民の費用は多しと爲さゝるに非すと雖とも若し面々衣食住の費用に節約を加へば所得稅の納稅に左迄の難儀を感ずまじ家屋稅戶數割の徵收に如何計の苦をか覺えん。「パジオー」は吾人に保證して曰く英國に於ては如何なる事業や雖とも苟も相當の利益を得るの希望あるものは決して資本の欠乏に依て其成立を妨けらるゝと無かるへしと。我邦に於ては有益の事業にして資本の欠乏に妨けらるゝものなきか。「パジオー」の明なきも人皆其果して然るや否を知らん。起す可きの事業山の如し利益の見込あるもの亦數ふるに暇あらさるなり。然れとも極々確實なる保險付の事業に非ざれば如何に莫大なる利益の見込あるも如何に欠くべからざるの必要あるも人は皆言はん我は此の如き危險の事業に投するの資本なしと。是必竟資本の足らざるなり貯蓄の未だ充分ならさるなり否全く貯蓄すると無ければなり。一家は經濟に付て言ふも亦此の如し。勞働し得る間は先々差支なしとするも一旦非常の變故に遭遇すれば忽にして生活の程度を下さゞるを得ず甚しきは妻子をして凍餓に泣かしむるの極に至るものあるべし。驕奢に金錢を濫費したればとて淸貧とは稱し難し。宵越の金錢を使用せさるは江戶子の德義のみ。彼の如きの淸貧此の如きの德義は余輩の取らさる所なり。然るに世の改良を論するもの往々物質上の利害に而已注目し經濟上の利害の如きは深く顧みさるが如し。例へば婦人の洋服論の如き或は開廣げ也と言ひ或は見苦しと言ふも其最も緊要なる經濟上の利害に至ては最後の考へと爲そもの多し　世間の人氣想ふ可きなり。

此に至て余輩は讀者諸君に向て下手な長談義の罪を謝せさるを得す。然れとも何故に余輩は淑女諸君に向て此の如く喋

く々するやは既に方々に於て覺悟せられたらんと信ずれば余輩も幾分か心を安んずる所ある也。諸君は家政を調理するの任を負擔し又は負擔せらるべき方々なり。日常の費用に節約を加へて貯蓄を爲すは方々の任なり。方々の毀譽褒貶は又社會の流行を左右するに於て少からざるの力あるべければ驕奢の風を賤み節約の風を貴ぶの慣習を誘導して廣く社會の風潮を改良するの端緒を開き内は自から勤儉節制を躬行して以て將來の計畫を爲すの一事こそ方々に向て之を求めずして其れ之を誰にか求めん。

今日は最も多事の時なり。日本臣民の義務一にして足らずと雖ども余輩の最も恐るゝ所は内部の腐敗なり社會の身代限なり若し淑女の方々にして余輩の希望を滿足せしめらるれば其功蓋し戰場の一番槍に優るものあらん。

婦人處世の要

口は禍の門古は身を切るの刃と古くから申しますが眞に千古に通したる名言でムいます。貴賤となく男子となく老少となく物言ふことは大切なるもので一言より仇を作り一言より友を得ます。さりながら禍は口より出づとも申して友を得るは少くて仇を作ることの多いものです。よしなき事を問はず語りしてトンダ災難を引き出し口が滑つて生涯人の恨を買つた例は澤山あります。殊に婦人に此弊多きから爲女子と小人とは養ひがたしなどゝいつて擯斥さき板倉周防の守が參政拜命の時奥方の口に錠を下したお話は淑女方の御承知の通りです。必竟婦人は胸中甚狹くして何事も心に貯ふるとか出來ないからのことです。しかしこれは敎育なきからのことで心掛さへあれば己の口を守る位のことは容易き事です。

饒舌ほど品格を落すものはムいますまい。かやうな人に逢ひますと直に裏店の女房を思ひ出させます。自分の知て居る事を他人が話して居ますと直に横合より口を出してイエそれはさうですさうではありません貴方のおつしやるのは違ひますなどゝ人の話まで横取りする方が澤山ムいます。これを默て聽て居ては何樣な不都合がムいますイエ默て聽くのが淑女の令德でムいましやう。かやうな差出口は第一話の腰を折り第二對手の心を害し第三自分の品格を裏店女房の地位にまで落します。かく申せはとて口を噤て啞兒の如くなれと申すにはあらず婦人は寡言なるこそ奥床しけれと申すのです。言を愼むべきは得意の時に當る得意の人に對し得意の事を話すに

ありと古人も申しました。ある程氣の張る場所へ出て氣の張る人に對し氣の張る事を話すときには饒舌に走らず言ふべき丈の事よりは申しません。しかし浮々と心に弛むなきとまでも思はず打出して話すは得意の時得意の人と得意の事を話すとにあります。一旦打出したるとはぬかつたりと思ふも取消はあらず古人も舌には駟も及ばずと誡めてあります。

口は罪を作り易いもので他の人を惡し樣に言ひなすより二枚の舌を使ふといふとも口の作る罪です。この惡口兩舌は誰も惡い事と知つて居りますが自分が慥かに知らぬ事を人のいふに任せて見届たやうに話立てたり或は見たり聞いたりした儘では興が少いから話に面白味を付くるが爲、あきとをそ付加て話そとれを之あるとです。これは何も惡氣でいふとてあく言ふのではないやうなとですが古人は之を綺語として誡めてあります。兎角付燒刃は剝げ易く追從輕薄の心底は見透され易いものです。口は禍の門舌は身を切るの刃です。

ある無慈悲な文人が婦人が人に愛される法をかう書きました。—「入らぬ物も買ひ。買はぬものにも値をあひ。誰を見ても笑掛け。子供をば乳母にまかせ、猫ばかりを寵愛し、そして御つくりが出來たら戸外をうろついて居さへすれば屹度人に愛される」

通信問答

宿鶯少女さまへ　(一)いらつめ第二十號にある肌の色を白くする法は手の外体の他の部に行ふことは出來ません。体の他の部の色を白くするには硼砂を薄く溶かした湯に入り。その他リスリン製の石鹸で充分に肌を洗ふ等、これらを行ふのが大抵よろしい法です。(二)フケを去る法はいらつめ第十六號髪垢を去る法が一番です。(三)靴のあらびたのを滑にするのは牛か豚の脂を塗り込み、跡に靴墨を引くのですそ。

篤子さまへ　(一)對島で人の死んだ時加勢に行くのを「ほねかぶり」に行くといふのは何故ですか、まだ考が付きません。いづれ考を得次第紙上に記しましょう。(二)火に炙ッて手に網もやうの出來るのは火タコといふ物でしやう。これは別に即効の直しやうも有りません。火にあたらぬやうにすれば次第に消へます。

竹田いと子さまへ　(一)金治は覺束ないですが、軽くは爲ります。しかし、素人療治はいけません。(二)靴下及び靴などの臭氣の止まるやうに是ぞといふ物は有りません。

紅幽女史へ　(一)正月に門松をたてるのは齡久しく、色か

變はらぬとの意味を寫したものです。（二）厠の臭氣は生の葉（草木いづれとも）を細かく刻んで蒔いて置くのです。最上の法です。

池田のぶ子さまへ　（一）砒石は劇毒な物です。決して開業醫の指揮許可なくて用ゐるもので有りません。（二）前々の號でも申しました、身体の肥過ぎたのを治すにはあるべく脂肪質の食物を用ゐ、そして毛織の肌着を着、適度の運動と新鮮の空氣に心を用ゐるのです。

淺香さまへ　（一）冬風に吹かれて顔赤くなり且痒みを帶びるのも多く血の清潔で無かつたところなどから起るのです。（二）之にも矢張り一問合せの藥を用ゐて害は有りません。小供の顔の赤ばしッて居るのも前と同様な原因からも起ります。　東京日本ばし區佐内町長谷川方で賣る美白散などは一寸それに利きます。

高橋たか子さまへ　（一）祝砲を百一發にする原因は色々調へましたが確としたとは分りませんが或人の説に百までは普通の數百一とは百以上といふ意味で異常のとを表するならんとありましたがあまり確な説とは思れませんから尚調べて。（二）布に付いたインキを落すには（Oyanuret of Potassium（藥品の名）液をその汚れたる處へつけるのです。たちまち落ちます。が、あとで冷水でその處を御洗ひなさい。（三）金屬の鏡の汚れを去るにはスポンヂに白粉をつけ、すこし水をつけてそれで磨くのです。（四）完全な編物の本はありません。（五）東都で寄宿舍の完全な女學校は飯田町の明治女學校小石川の跡見女學校などです。（六）インキを布から落す別法を序にてゝに載せます。インキが付くや否や出來るだけ手早く新鮮の牛乳をその汚れに塗り（餘儀なければ婦人の乳）、しばらくして矢張り冷水で洗ふのです。

身体の肥滿する法及び黒子を去る法

いらつめ第二十號を拜見しましたところ、通信問答の部に皆山女史へ御こたへの所に身体の肥滿する法は別に有りませんとありましたが、私しが或る本を見ましたのに龍肉眼と申す藥を一日に二匁つゝ三度に用ゐ、一ケ月も行へば効を奏するとありましる。眞僞は知りませんが御試みなすつては如何でしやう。右藥の價は至極安直です。

黒子の取り方を花川操嬢さんに御答へでしたが、やはり右の本に蕪の種をすり、毎夜黒子に塗るといゝと見えましる。

右は知らせだけ。御参考に申上げます。

村松みみ子

いらつめ記者さま御許

拝啓いらつめ第廿號に御たづねの松竹梅を祝に用ゐる事の起原を申上候

梅はふるく烏梅と書く音なり、訓にあらそ。烏梅とも藥品ふ黒く乾たる實を舶來しゐるが始めあり。花を賞そること天平年間山上億良の集に歌によみたるをはじめとす。王仁の歌これ花とゐふは櫻の事。松は七種のいはひとて正月の吉事に移し植たるより門前ふ立つる事ふもあれり。門松の事は兼好のつれ〲草にも見えたり。凡て松竹梅は各壽命を永く保つ故に祝ひ用ゐたるなり

坂口今朝市

いらつめ記者さま

坂口氏の御説、いまた充分とは申せませんが、御厚意はたしかに受けました。因つていらつめ第廿一號さし上ます。村松きみこさまにも同様御厚意を拝謝しまそ。

餘興

新作謎 四月七日〆切り 懸賞 皆答の方には 小説一冊 (金港堂出板の) いらつめ一冊 は六題解當の方に進せます

(一) 吸へは吸ふほど殖ゑ吹けは吹くほど減ります（氣体てはあい）

出題者　本郷　富　嬢

(二) 私は大きなものですが笠をかぶれは高くなり物に跨れはふとそある

出題者　播摩　龍　野

(三) 私は毎日〱ブラ〱遊で居りましてそして皆様ハアレは感心たと仰せられます。

出題者　神田　得手山人

(四) 手品師　東西〱此兎の首をチヨチキリますれハ二羽の鳥と化ますピーリピリシリピリポン　看客アレ〱飛で行ちまッた

(五) けせばけすほどふゑるものは

(六) 口はありますが底はありません横にしても竪にしても倒にしても水をつぎこめまそ

(七) 母親が小供を連れてお城を見物に出掛け混雑中に小供を見失ひし時の母親の述懐（魚の名七で解く）

各欄末古謎の解

(い) はると蟲が飛込む　(ろ)うつちやツて置てもとける

(に) ありたすと恐ろしい　(に)巴か付てゐる

(は) のりいれておく

第二十號餘興の解

(1) 猫の讀孔　(2) 烟筒

(3) ちと無理な謎でそして古くて名高い趣向を借用したので皆様の御叱かりを蒙るかもしれませぬが御承知の方は少なからうと存じましてそこで一にはペーヤスのやうないらつめを賣出す爲め一には吾々人間の眼の迷を皆様に御話し申すために出したのでムいますがアノ附錄の中にいらつめと白く扱た赤い玉の事でームいますこれを日向に持行たアノ赤玉の眞中を一心に一二分間（若し足らずば三四分間）見つめてゐて少し眼の疲れて來た頃他の眞白の紙を暫らく見てゐますと「いらつめ」と云ふ白い字ハ赤く顯ハれ出ます又赤い玉は綠色に見えます

赤玉ニ中ニ「いらつめ」と云ふ字が白けれは白いほど後ニ白紙ニ赤く出ます。　また赤王か赤いだけ後の白紙ニ玉は綠色に見えます

(4) 泡

(5) 火箸

(6) は記者の間違だらうと皆様から御叱りを受けましたかさら〳〵左様な次第ではムいません　ナンで左様な粗略を致しましやうアレは謎の積では然しムいません。皆様

ら永當々々いらつめを御引立てくださされますから皆様の爲めに安產の御斷禱をしたのでそ。　なせでそ、されば

五でも三二（六）

看客諸君　謎ほど五六理

さりながら問題解當の方にハいらつめ第二十一號一冊差上ますそ。

解當者は　松雅江つる子○蛇口たま子○高橋訓○三橋亭義敬○石津佐太郎○日野こはる子○金丸都留子○増田とめ子○坂本はる子○小川とら子○深澤秀藏○三浦たけ子○杉山源治郎○長瀧てう子○竹田いと子○石曾根德太郎○關口一郎○天才子○淺尾えい子○花ニ家まう子○阿久保かし子○岩藤薫○稻垣とみ子○紅幽女子○小林鎌郎○山本しげ子○那須かね子○鎌山居士○得手樂人○可愛樓主人○新津とみ子

月報

○皇太后宮熱海に行啓遊さる　去る五日青山御所御出門新橋臨時滊車に召させられ當日は小田原驛に御一泊翌日御板輿に召させられ加茂第一御料地の離宮へ御安着遊され二週間御滯在遊さるよし承る

○皇后宮ニ壽德　左の文章ハ華族女學校下日田新子女史が皇居御移轉の翌日生徒の爲に述へられたる演說の大意の由なるが皇居炎上の事より十七年間假の皇居にましまし皇后宮の大御心を仰ぎ奉るに足るべけれハ玆に女學雜誌よりを轉載す

（上略）いでや、西丸の宮、炎上の夜は、わらはも後宮に宿直せしが、火あり〳〵と呼ぶ聲に立出れば、はやむせかへるまで烟みちぬ。心あわたゞしくて、裝束もしあへず、御前に參りて、急ぎそゝのかし奉る程に、駕輿丁心得て、御輿さし寄すれど、切めて暇なくて、御歩より出で給ひぬ。夜半の風、炎を吹き巻きて、火の勢は、雨ふられど降り來ればいと苦し。まし大御身に恙なかられど、心の内に天照大神祓いのりつゝ、辛くして吹上の御苑に逃げのびつ。つとめて赤坂の假宮に率るべき由、議定まりぬ。宮は、もと紀州侯の私邸なりき、そのかみは大后の宮わたらせ給ふなるが、さるべき所なれど、きら〳〵しうもあれ。そらぬなたりは、殿も廊もなかば壞ちたる儘にて、住む人もなければ、庭も籬も秋の野らと荒れたれど、先ず南おもて掃ひあけさせて、假のおましつらひしつ。かゝれば、晝の御座も程近くして、帝、聲高に物仰せらるゝには、わらはが曹司へさへ、ほりて聞えき。いと畏し、又ある時はしぐれして、古き軒端に雨漏れば、候ふ限りそゝばしりて盥ものせよ、桶もて參れと、のゝしる事も度々ありき。されども帝は高津の宮をしのばせ給ひなど、覺し出でゝ、何事ぞねんじおはしぬ。后の宮は八疊の一間をおまし所と定めて、御假粧の間にも、入側といふ端近き所をかこひたれば、ほぐしあげの女官參る折は、うへには具にもおはせで、明障子にひたと添ひ給ひて御髪をさせられぬ。かく所せき御有樣を窺ひ知る者、誰かは悲しういとほしう見奉らざらむ。心なき鏡さへ、面をくもらせ、梳げの露も常よりは繁しとこそ見えたれ。候らふ女房たち、旦暮にはしたなしとつぶやきあへれば、うへ、聞しめし餘りて、いでや、石の上にもみとせといふ諺のあるを、いふかひなきや。みつから不徳にして、國母と仰がれ、玉のうてなにあらしつるゝも、埴生の小屋を見るたびに、いや心ぐるし。いかで一度は、賤の宮にも馴れなむとおぼ思ひしかとて、御料紙に

　こゝになむ、占めし席はせばくとも、
　　廣く尋ねん文の林を。

と遊ばしき、此大御歌ぞかしこけなさは、かごとがましきうれへはひそまりぬ。（下略）

○女子佛國學士會院の賞牌を得　去る十二月二十四日佛國學士會院年會に於てボルデン賞牌は固躰運動の數理を進めたる爲めに瑞典國ストックホルム大學校教授ソフヒヤ、コフアレフスキー婦人（一千四百五十八年より九十年まで匈牙利國王なりしマチアス、コルフヒヌスの後胤なりと云ふ）に授與したりと予ーチユユウアに見ゆ（東洋學藝雜誌第八十九號）

○廢人慈善院　本郷弓町二丁目卅四番地岸本與渕子の發起せられたる廢人慈善院は專ら啞生盲人等に技藝學科を無報酬にて教授せらるゝの目的にて廣く慈善家の贊助を求められ既に其筋へ願ひ出でられたる趣きにて本月中には開校の運びに至る可しと云ふ

○京都私立女學校　元京都府女學校長なりし捷津實一郎氏の設立に係る全校に於ては氏が多年の經驗により彝倫道德を本とし日用必須の普通學科及高等學科を授け且女子適應の職業を敎へて力に食み世を益するの道を辨へしむる樣敎授せらるる由なるが來四月一日より改正の規則を實施せらるゝよし

社告

記事の多いときは小説空行を月は掲載しません。しかし、脚圖れもう近うムいます、また次號よりは美術沿革史を掲載いたします

廣告

出張教授を望む

壮年にして品行方正高等の教育を受けたるものあり今般餘暇を以て毎日官員華族若くは其他の令息令嬢君の内に英語出張教授仕度候間御望の方は何卒弊社まで御通知被下度候尤時間は午後の中一時間乃至二時間とす又二人以上御組合ふて一同へ教授仕候もよろしく候

いらつめ第二十號目次

家政。 料理法＝兎の玉子煮スパニッシュ、フリッタース＝革を洗ふ法＝梅の花を三年貯ゆる法＝革又はくあらぬ法＝万年糊製造法＝白無垢の垢を落す法＝甘藷百珍

文藝美術。 二月十一日憲法發布祝歌（美妙齋）
柳五首（佐々木弘綱）
柳一首（孤芳女史）
鶴三首及び故郷松三首（佐々木信綱）
四季の遊今様四首（東宮鐵麿）
唱歌の位置＝第一立唱の位置第二坐唱の位置＝口＝舌＝氣息の抜習＝横膈膜の勢力を増し其運用を強壮ならしむる練習＝脇筋を強壮ならしむるの練習＝胸筋を強固ならしむるの練習＝雑則（夢の屋かをる）
柳櫻都錦繪二幕目
源氏物語まなびがたり＝桐つぼの條（立花屋かをる）

雑纂。 訓盲啞院の卒業
天保八年の女學校設立案
日本の小兒

小説。 をだ巻（加納雨柳齋）

寄書。 如何にして女子を教育すべきか
枕草紙まなびがきに就て
秋田訛に就て

批評。 いさり火
將棊の譽
蝴蝶（不知庵主人）

通信問答。 枳殻と硼砂とを賣る店＝家政讀本＝風を引かぬやうにする事＝祝賀に松竹梅を用ゐる事＝聲を清くする法＝ホクロを去る事＝手の色を白くする法＝歯の黄色を去る法＝髪毛を保存する法＝および毛を延す法＝身体の肥満する法＝眉を自由ふする事＝記臆をよくする法＝上戸を下戸ふする法＝十七八歳の令嬢衣裳見立＝視力を強くする法＝二十一二歳令夫人の衣裳見立＝白髪を黒くする法＝鹽酸アンモニヤ及び硼砂と硼酸＝毛を薄くする法＝わきがを除く法

懸賞文藝。 應募得点
歌（竹柏園女史）（高橋満喜太郎）
文（藤梅子）（雲のや）（一貫齋）

いらつめ第二十一號　明治二十二年三月十八日發兌

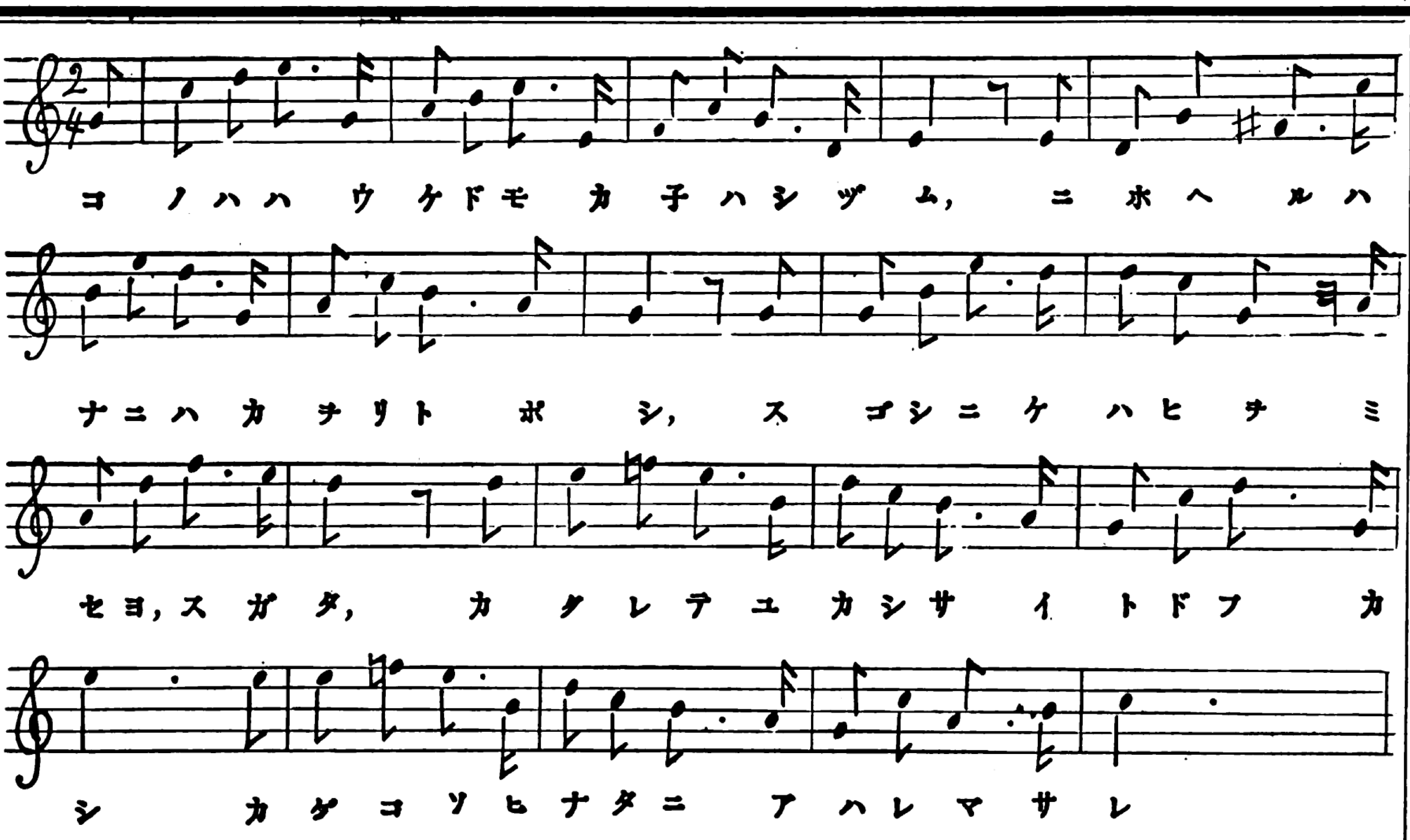
いらつめ定價一冊八錢半年分四十五錢一ヶ年分八十錢府外郵税一冊一錢ッヽ

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

東京神田區駿河臺南甲賀町八番地

發行所　成美社

(遞信省認可)



つゝましさ

木の葉は　浮けども　金は　しづむ。
にほへる　花は　かをり　とぼし。
簾越しに　けはひを　みせよ　すがた。
かくれて　床しさ　いとゞ　ふかし。
かげこそ　ひなたに　あはれ　まされ。